

英語らしく発話するには

高橋栄作（高崎経済大学 教授）

「英語母語話者のように発話するにはどのようにすれば良いのか」、英語学習者であれば誰でも考えたことがあるだろう。白井(2008)は「日本人は英語ができない」理由として、両言語の言語間距離をあげている。窪菌他(1998)は、言語類型論に基づき、日英語の音韻構造の違いを次のように整理する。「モーラ言語と音節言語」「開音節言語と閉音節言語」「音節拍リズムと強勢拍リズム」など 以上のように、日英語は対照的な言語として分類されるのである。つまり言語間の距離が遠いのである。では、日本人英語学習者が英語母語話者のように発話するには、どのようにすれば良いのであろうか。両言語には、言語間の距離があるため、学習者は正確な知識を持ち、それを処理することが必要となる。音読の学習としては、「リッスン・アンド・リピート」、「シャドーイング」などがある。いずれの方法もモデル音声を聞きそれを復唱し、英語発話を学習するのであるが、学習者は正確な知識を持ち、それを流暢に処理しなければ、正しい発話は身につかない。そこで本研究では、学習者が音声認識をおこない「英語母語話者らしく発話」できるようになるにはどうしたら良いのかを考察する。

研究手法としては、まず学習者(被験者；英語習熟度レベルは英検 3～4 級)は、英語発話に見られる音の連結、脱落、同化と言った特徴を学習し音声を認識する。次に、それらの現象を含む次のような英文(5文)を音読しそれを録音する。

- (1) a. Keep on walking. Keep と on の音が連結して発話される。
- b. They don' t care. don' t の /t/ が発話されない。

実験者はその音声を英語母語話者の発話と比較した。比較する手段としては、Google の音声認識の手段を利用した。被験者の音声と英語母語話者の音声を比較する前に、Google の音声認識が正確に動作するのか、大学生用のテキストに付属している音声と音が連結されて発話されているものをまず認識対象として分析した。英語母語話者、学習者の音声と音声分析ソフトで学習者の音声に連結や脱落を加工した音声を分析対象とした。

結果は、テキストに付属している音声は、正しく認識できた。英語母語話者の音声は、5文中4文が正しく認識された。学習者(英検 3 級レベル)の音声は、5文中1文のみ正しく認識された。次に、実験者が学習者の音声に連結や脱落を加工した音声を分析したところ5文中3文が正しく認識された。このことから、ピッチやイントネーションや音素の相違などはあまり重要でないと言えるかもしれない。

今回の実験から、Google の音声認識は音声をほぼ正確に認識できるといえそうである。また、英語学習者は、音の連結、音の脱落と言った特徴を学習し正確な知識を持ち、それを処理して発話することにより、「英語母語話者」のような発話が習得できるといえそうである。

日本語の「今」を取り入れる学習者と「若者ことば」 -台湾の高等教育機関でのアンケート調査から-

松井一美（創価大学・非常勤講師）

平澤佳代（朝陽科技大学・助理教授）

新型コロナウイルスの感染拡大は日本語教育にも大きな影響を与えている。実際に日本へ渡航することすら難しくなったなかで、学習者はインターネットにより、日本語の「今」に接し、日本社会や日本文化に対する理解を深めている。本稿では、日本語の「今」を代表するものとして、いわゆる「若者ことば」をとりあげる。

日本では、若者を中心に用いられる言葉がある。例えば、「ぴえん」という「泣き」を表す言葉は2020年11月30日に東京都内で行われた『三省堂 辞書を編む人が選ぶ「今年の新語 2020」』選考会で選出されるなどしており、たとえ一時的なものであったとしても日本語全体に与える影響を見過ごすことはできない。こうした「若者ことば」はSNSやインターネット上で、既存の表現にとらわれることなく自由に表現されたものが広がっていると考えられる。

本稿では台湾の大学で日本語を学ぶ学習者を対象にアンケートとインタビューを実施し、彼らがどのような日本の「若者ことば」を知っているのか、どのようにして知ったのか、実際に使ったことがあるかなどを聞いた。調査は、2021年1月～2月、日本語を主専攻とする学生23名および日本語を第二外国語として学ぶ学生60名に対し行った。アンケートでは、日本語学習動機、日本語学習歴、日本留学経験のほか、知っている「若者ことば」とその「若者ことば」をどのように知ったか、さらに、新型コロナウイルス感染症拡大が日本語学習に与えた影響について質問した。アンケートの結果、ほとんどの学習者が教室以外の場所で、所謂日本語の教師から学ぶのではなく、動画サイトなどを通じ、自律的に「若者ことば」に接していることや、実際に使用していることが分かった。また、学習者の「若者ことば」に対する態度は概ね肯定的で、「若者ことば」を使うことで自分があるコミュニティーの傍観者ではなく、その一員になれたことが実感できるというような意見が見られた。さらに、インターネットで日本語関連の情報を見る時間がどのくらいかとコロナ流行前に比べ日本語関連のサイトを見る時間が増えたか、また、インターネット上で日本語学習に使える道具が増えたか聞いたところ、日本語を主専攻とする学生は毎日20分以上日本語関連の情報を見ていること、コロナ前後で時間の増加はないことがわかった。一方、日本語を第二外国語として学ぶ学生は、多くがコロナ流行後にインターネット上で日本語学習に使える道具が増えたと回答していた。日本語主専攻の学生が、コロナの影響を受けていないのは、もともと日本語学習にインターネットを活用していたからだと思われる。

地域連携プロジェクトの新たな方策と可能性 ——時代に即した文化振興活動と社会貢献の試み

関口 英里（同志社女子大学学芸学部メディア創造学科 教授）

産官学連携による地域活性化を目指す「プロジェクトプランニング演習」は、大学が位置する京田辺市の文化特性を活用した地域振興と社会貢献の実現を目標に、市役所をはじめ多くの組織や団体、地域の企業や店舗・施設等との連携を行うメディア創造学科独自の科目である。連携先、地域社会、学生の各立場にとって有形無形のベネフィットを生成することを目指し、商品開発やイベントプロデュースを主軸に地域振興活動に取り組んでいる。しかし一昨年からコロナ禍は、本企画運営にも大きな影響と変革を及ぼした。多くの人々との地域密着コミュニケーションを伴う商品の生産・販売やイベントの実施等、従来のコラボレーション方式が困難となる状況下において、いかに有効な地域貢献活動と体験的な学びが実現できるか。メディア活用による効果的な地域の魅力発信と広報の実現で、課題解決に挑戦した昨年度の事例を提示したい。

昨年度の課題は、地域密着型交流と実地作業を主旨とするプロジェクトの根幹を維持したまま、最大限オンラインのメリットを活用し、時流に即した独自企画でむしろ従来を超える成果を挙げることであった。そこで通例企画であった市内各所でのイベントや商品販売を、ネット活用による市の魅力宣伝と情報発信に方向転換した。市長からご当地キャラ迄、様々な人々が市内名所を背景にダンスでメッセージを伝える PR 動画等、複数コンテンツを製作して YouTube や各種 SNS で発信することで、対面イベントより効果的かつ広範な広報を試みた。その結果、対外的な市の認知度や、特に若年層市民の地域関心度が向上したことが事後調査から確認できた。近年 SNS を活用した広報を行う自治体は増えているが、その多くは単発で行政視点の画一的情報提示を行うものが多く、十分な効果を上げているとは言い難い。従来型の紙媒体から SNS まで、多様なメディアとコンテンツの効果的な併用によるクロスメディア手法を取り入れ、的確なターゲティングを行うことが今後の自治体広報でも急務となる。市の強みとメディア学科特性を活かした戦略的連携に基づく本企画は、市広報の一助として実効性を持つとともに、新時代の公共 PR を実践する第一歩となったといえる。

以上の成果を踏まえ、自治体の広報を成功に導く方策として、受け手による情報の深化とネットワーク拡大を促進する戦略、即ち “Aware, Prepare, Perform, Spread” の各段階のフローと有効な SNS 活用による情報発信の重要性に基づく独自モデルを提示したい。本企画はその一端の実践であるとともに、危機を好機に変え、地域との相互発展をもたらす新たな産官学連携の可能性を拓くものでもある。本質的な地域振興には、厳しい状況下での継続可能な新たな仕掛け作りこそが重要となる。今後も効果検証を行い、時代と地域の要請に応えるプロジェクト型地域連携活動を継続したい。

日本語教育における教育ビッグデータの活用 —MOOC を例に

葉淑華(国立高雄科科技大学 教授)

日本文部科学省(2019)では、ICTを基盤とした先端技術や教育ビッグデータは教師本来の活動を置き換えるものではなく、子供の力を最大限引き出すために支援・強化していくものだとしている。寺澤(2016:68)では、教育ビッグデータは、他の分野で集めたデータと比べて、「誰が、いつ、どこで、何に対して、どのように、何をした」といった行動の生起条件をかなり制御して反応データを集約解析できる点が大きなメリットだと述べている。

従来の研究では、収集されたデータはそのほとんどが横断的データであり、縦断的データを用いた研究は極めて少ない。しかし、教育ビッグデータは横断的研究にも縦断的研究にも貴重なデータを提供できると思われる。

近年、MOOCは教育の諸分野を学ぶことに活用されている。MOOCコースにおいては、受講者の学習履歴などのデータが自動的に蓄積されている。筆者は台湾のTaiwanLifeにてMOOC「日語筆記-台湾節慶知多少? (日本語ノート-台湾の年中行事をどのくらい知っているのか)」を2回開講した。葉(2020)では、本MOOCコースの教材概要及び実施プロセスについて詳しく紹介したが、本論文は受講者のMOOCコースのアクセスログデータを取り上げて分析するものである。

考察した結果、受講者の学歴や職業などのレディネスは大学の一般対面授業ではありえないほど多様である。また、大学の一般的対面授業と比べて、MOOCコースの特徴として取り上げられるのは、登録者はイコール受講者ではないこと、講義動画に興味を持っていないながらも、テスト・テキスト・ディスカッションといった他の学習活動にも関心を持つとは限らないことである。

また、成績評価の結果に基づき、受講者を4グループに分けることができる。グループ3とグループ4の受講者は各成績評価の学習活動に熱心に順番に取り組む姿勢がみられる。それは最終成績の合格につながったと判明される。

修了生が僅か45名(20.36%)しかいないことは、大学の一般対面授業では滅多に見られない現象である。受講段階で挫折したことはMOOC上の課題として考えるべきであろう。また、修了率と学歴との関係はどうか、修了者と非修了者における履修状況の差異はどうかかなどは今後の課題である。

日本語の二重主語構文の英訳に関する初級英語学習者の文産出に関する一考察

橋尾晋平（名古屋外国語大学・専任講師）

日本語は基本構造が「主題＋解説」である主題卓越型言語であり、一方で、英語は基本構造が「主語＋述語」である主語卓越型言語に分類されるため、多くの日本人初級英語学習者は、主題卓越型構造が強く反映された日本語文を英語で表現する際、非文法的・非機能的な文を産出してしまう。

日本語の主題をもつ文の特徴として、(i) 主題の前置・(ii) 提題助詞「は」のマーク・(iii) 空主語・(iv) 二重主語・(v) 述語の代用化が挙げられる。発表者が過去に行った学習者言語の調査では、(i)・(v) の特徴が日本人初級英語学習者の文産出を困難にし、(ii) や (iii) の特徴の文産出に与える影響は小さいと判明した。ただし、(iv) に関して、二重主語文「X は Y が Z」は、学習者に与えた文に応じて異なる結果が示されているため、より詳細の分析・検討が必要であると考えられる。

二重主語文には、(ア) 助詞「の」が提題助詞「は」に交替した文・(イ) 主題 X が述語名詞の連体修飾部である文・(ウ) 主題 X が Y や Z の被修飾語である文の 3 種類があり、(ウ) をさらに分類すると、Y に名詞の代用形式がついたものが入る文・Y に名詞句が含まれるパターン・X と Y が分離できないパターンが見られるため、

本発表では、どのような二重主語文が日本人初級英語学習者の文産出を困難にするのかを示すため、日本人初級英語学習者の大学生 100 名を対象とした和文英訳のテスト調査を実施した。100 名の学生を 50 人ずつの 2 つのグループに分け、同一の英語で表現されると想定している二重主語をもつ文ともたない文を用意し、一方のグループには、「うさぎの耳が長い」のような二重主語をもたない文を与え、もう一方のグループには、「うさぎは耳が長い」のような二重主語をもつ文を与え、それぞれのグループの学生が与えられた文の英訳を課し、二重主語文のタイプに応じて、二重主語の有無と英訳の正確性の間に差が見られるかどうかを分析する。

調査の結果、(ア) のタイプの文の英訳は、所有格の用法に関する誤りは見られたものの、日本人初級英語学習者にとって、英語で表現することは比較的容易であり、加えて、(ウ) のタイプで、かつ Y に名詞の代用形式がついたものが入る文も全体的に誤りが少なく、これらの構文は、英語による文産出に与える影響は小さいと示された。一方で、(イ) のタイプの文や (ウ) のタイプの Y に名詞句が含まれるパターン・X と Y が分離できないパターンの文に関しては、X・Y・Z の間の主述関係・修飾関係を踏まえて、英語で表現することは困難であると判明した。

不倫行為における日本・台湾婚姻観の比較検討

謝碧齡（東呉大学大学院日本語文学系卒）

近年日本において、不倫問題がマスコミで大きく取り上げられ、謝罪会見や失職、離婚問題に発展するといったケースがしばしば見受けられる。日本では不倫行為により社会的制裁、民事責任を負うものの刑事犯罪になることはないが、台湾では姦通罪に対する懲役刑が本年6月1日に至って漸く撤廃された。

	日本	台湾
不倫行為への夫婦反応	社会的制裁あるも比較的寛容	面子問題 家庭内地位権利問題
刑事罰	姦通罪 1947年廃止	姦通罪 2021年廃止

ここでは、日本と台湾の不倫行為への対応・処理方式における差異に着目した上で、日台における婚姻観、婚姻に対する責任義務にどのような特徴があるか比較検証した結果を発表する。また、夫婦の氏姓に関する法律規定の日台間の違いを分析し報告する。

一家が永く繁栄し続ける為、夫婦の使命は「家の重視」にあり、「家」の継承に関して、日本では独特な「婿養子」制度が存在する。台湾では「直系血縁」を重視し、家業が一族以外の氏姓の者に受け継がれることはない。また、氏姓は血縁の出所を示しており、改姓は祖先に対する不敬となる。一方、日本の夫婦同姓制度においては、家の一体感は同一氏姓からもたらされ、そして台湾とは異なり氏姓は血縁の継続を現わすものでもない。

台湾の婚姻観では、儒家思想に基づき、夫婦は次世代への血縁繋がりを導く重要な紐帯である。そして伝統的に父権文化における「婦徳」として、父系血縁の純正を確保するため、女性の貞操に大きな関心が払われた。その結果、夫を持つ婦人の不倫は、その産んだ子供が夫の家の純正血縁外であるのではとの疑念を持たれ、往々にして既婚男性の不倫に比べより厳しい責罰を受けることになる。

日本の夫婦関係も養子縁組も血縁に拠らない擬制的親族関係と言え、不倫行為は配偶者への婚姻忠実義務違反、倫理上の問題として、許し得るかは夫婦主体で決めることになる。法的には民事賠償問題となるが、刑事責任は問われないし血縁問題にもならない。

台湾の夫婦関係においては、男女平等との観点で伝統的な「冠夫姓制度」が崩れて来ており、子供の氏姓は父母の姓より自由に選択できる。一方で、跡継ぎを決める際は父方の血縁が極めて重視され、法的にも直系血縁を守るため、婚姻中は、嫡出認定後に改めて否認できる旨、法律に定められている。こうした血縁重視の執着が無くなれば、真の男女平等を迎えることができるかも知れない。

	日本	台湾
親族関係の枠組み	養子縁組・婿養子縁組制度あり 一家・夫婦同姓（血縁と関係せず）	子女：直系血縁 夫婦別姓（血縁相異による）
「家」の概念	経営能力を持ち一家の財産を永く継承する経営体	夫婦で子を産み育て、血縁を繋ぐもの
家族のあり方	一家が同姓	主に父系、直系血縁の子女
夫婦のあり方	夫婦同姓で夫の姓が圧倒的、妻は夫の付属品ではないと熟年離婚が増加	夫婦別姓、婚姻により妻には代々血統を継ぐ子育ての圧力
子女のあり方	直系血縁、養子縁組制度あり 両親と同姓	直系血縁 父母いずれかの姓を自由選択
「家」の継承	多様、能力重視の傾向	血縁、宗族祭祀を重視
男女の地位	表面的には平等 夫婦同姓で夫の姓が主流	表面的には平等 妻への子育て圧力は弱まる傾向

国際養子となった戦後混血児研究

－当事者の視点から：『子供たちは七つの海を越えた』をケーススタディに

ウォント盛香織（甲南女子大学 准教授）

日本が1945年第二次世界大戦で敗戦すると、アメリカを中心とする連合軍が日本を占領し、約40万人の占領軍兵士が日本に駐留した。この時に起こったことが、日本人女性とアメリカ人兵士の間に多くの混血児が生まれたことである。その数は約1万人と推計されている。こうした子どもたちの一部はアメリカに両親と共に行き、一部は日本で両親共から捨てられ、孤児となったり、孤児にならなかったものの、親が育てることができずアメリカに養子縁組された子どももいた。

昨今は戦後混血児に関する研究が進んでおり、多くの研究書が出版されているが、こうした研究書は、戦後混血児の日本での経験が研究の主な対象となっており、国際養子となって諸外国へ渡った混血児研究は稀である。本研究はこうした研究の空隙を埋めるべく、研究の第一段階として、昨年度同学会全国大会において、実子を国際養子に出さざるを得なかった母親の視点から国際養子となった戦後混血児に関する発表を行った。今年度は研究の第二段階として、当事者の視点から、国際養子となった戦後混血児に関する発表を行い、研究言説ならびに視座の複雑化を試みる。

本発表はまず、昨年の発表で行ったように、国際養子となった戦後混血児について議論するために、戦後混血児が生まれた歴史的背景と、日本社会が混血児をどのようにまなざしていたのか、当時の言説についても説明する。こうした背景を述べた上で、戦争混血児で国際養子として渡米した人々が自分の肉親、養親、アイデンティティに関し、どのような葛藤を抱え、どのようにその葛藤を乗り越えたのか、もしくは乗り越えられなかったのかについて考察する。

議論をするに当たっては、三井財閥令嬢の澤田美喜が設立ならびに運営をしていた戦後混血児の養護施設であったエリザベス・サンダース・ホームから、アメリカに国際養子に出された混血児の当事者言説をまとめた、『子供たちは七つの海を越えた』を分析対象とする。本著は国際養子として渡米し、アメリカで30年過ごし、成人した22名のエリザベス・サンダース・ホーム出身の混血児の日米での経験をインタビューしたものである。これだけの数の戦後混血児でありかつ国際養子となった人々の声をまとめた文書は珍しく、研究対象として価値がある。本著の分析を通じて、彼/女たちの言葉から、国際養子当事者の心象を探っていく。

保育現場における多文化共生の課題

三井真紀（九州ルーテル学院大学・准教授）

現在、日本の保育所や幼稚園等における、外国籍児童や海外につながる子どもの数は増加の傾向をたどる。保育現場における多文化共生を目指す取り組みは、これまでも「多文化保育」「多文化共生保育」等としてイメージが定着しつつある。しかし、残念なことに、多文化共生が保育という文脈から語られ、考察され、実践可能であることが理解される機会は、就学後に比べて非常に乏しかった。近年、保育・幼児教育分野における、非認知能力が注目され、見えない力や心の育成についての理解が深まったことにより、保育の中の多文化共生の議論は、就学前から始まるべきだと認識が始まったことは幸いである。

本研究は、日本とフィンランドの保育空間において、多文化共生の原理を分析する調査者が、今後の研究アプローチについて検討するものである。乳幼児期の生活世界である「保育」をとりまく事象を読み解くことが、多文化共生社会の未来を考える鍵になるという仮説のもと、本領域の可能性を展望していくものである。調査データは、主として2019年8月および10月のフィンランドにおける現地調査、2020年1月～2021年4月の日本およびフィンランドのオンライン・インタビュー等の資料を用いた。

保育の中の多文化共生では、最終目的をトラブル解決としていない。保育現場で起こりうるエピソードは、ただちに問題を排除することよりも、そのプロセスに焦点をあてることが重要であるという保育の原理に基づいているからである。多文化共生における子どもの「生きにくさ」を再生産しない環境構成について考察することが重要とされる。従来の保育研究では、人権意識が乳幼児期から始まること、0歳から文化差を感じていることが明らかにされている。また、文化間移動をする子どもの戸惑いや混乱は確かに存在し、大人がどのような対応をすべきかで子どもの心理状態に大きな影響を与えることも理解された。就学前に健康で偏見のない人権意識を作ること、その基盤が「自己肯定感を高めること」につながることも考察されてきた。そもそも、乳幼児期に他者に大切にされ、自己肯定感を味わいながら生活する営みは、多文化共生のための特別な方法論ではなく、保育そのものである。つまり、保育における多文化共生の実践を理解することは、保育の原理を改めて問い直す実践となる可能性をもっている。日本とフィンランドにおける保育研究を通して、多文化共生時代の困難さだけでなく、豊かさの原点を掘り下げたい。

※本研究は JSPS 科研費（21K02322）の助成をうけた研究成果の一部である。

ビジネス接触場面に向かう留学生の否定的評価と調整 —アルバイト経験の事例から—

末田 美香子（東洋大学 講師）

本研究では、在日留学生のアルバイト場면을日本人とのビジネス「接触場面」（ネウストプニー1995）と捉え、その経験を「社会文化管理プロセス」（村岡 2006）の観点から分析し、否定的評価の内容と調整行動の傾向を明らかにした。

調査対象者は、在日1年以上、日本人と共に働くアルバイト経験が半年以上のアジア圏の留学生44名である。職場は飲食店、小売業であった。調査は、調査者が対象者に1対1の対面による半構造化インタビューを行い、発話を文字化した。インタビューは留学生がアルバイト経験で留意した出来事の内容と評価、及び調整行動について通時的な観点から尋ねた。時間は30分程度である。

否定的評価の事例は54件得られた。その内容は、「仕事のやり方・考え方」（29件）「コミュニケーション」（13件）「職場の人間関係」（10件）「契約」（2件）に関するものであった。調整行動は、村岡（2006）による以下の枠組みに分類した。

A 母文化規範に向かう調整（母文化の中で生成された規範に向かおうとする調整）

① 維持・促進（規範を維持・促進しようとする）② 抑制（規範を抑制しようとする）

B 相手文化規範に向かう調整（新しい相手文化との接触の中で形成されていく規範に向かおうとする調整）① 促進（規範を促進しようとする）② 抑制・回避（規範を抑制・回避しようとする）

C 接触文化規範に向かう調整（母文化規範にも相手文化規範にも向かわず、直前の評価とは別な調整行動を選択したり、新たな規範に向かおうとする調整）① 自己調整 ② 他者調整 ③ 相互調整

調整が行われた事例は41件（75.93%）あった。調整行動のタイプは、上記C①「接触文化規範に向かう自己調整」が最も多く、全体の約8割を占めた。また、「仕事のやり方・考え方」においては、「接触文化規範に向かう自己調整」の後、上記B①「相手文化規範に向かう促進」を行う事例が全体の過半数を占めた。

この結果から、留学生のアルバイト場面における否定的評価の調整行動は、①初めに接触文化規範に向けた自己調整を行う傾向があること、②仕事のやり方や考え方に関しては、自己調整の後、評価を見直し、相手文化規範を促進することも多いことがわかった。

<引用文献>

ネウストプニー, J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店

村岡英裕 (2006) 「接触場面における社会文化プロセス—異文化の中で暮らすとはどのようなことか—」 『日本語教育の新たな文脈』 (pp. 172-194) アルク

ディアスポラにみる文化的スキーマ —在台二世の同化と調節—

石川隆男（台湾大学日本語文学系・兼任助理教授）

本論は、日本統治時代に外地で生まれた日本人二世の自己アイデンティティの拠り所が、一世とは異なる文化的スキーマを持つことを探ることを目的としている。

かつての日本統治時代には、内地・外地との間で異文化交流があった。そのため、内地の故郷を離れ、外地へと移り住んだ日本人の存在がある。彼らは日本文化を背負いながらも、外地で労働者として異文化の環境下で生を営んでいた。一般的にはこれら人々を外地移住者として内地人の視点から類型化を図り、ディアスポラの民と区別するであろう。

しかし、この類型化に二世を問題意識として加えると、こうしたステレオタイプではズレが生じる。外地移住一世は、確かに自己アイデンティティとして実在する祖国や故郷への思慕を主体的に選択し、自分の認知や行動の拠り所や支えにしたであろうが、二世の場合はそうではない。何故なら二世の故郷は外地＝異郷であり、現実的には一世の持つ祖国や故郷への思慕の一切を持ち合わせていないからである。この二世の背景にある文化的スキーマは、むしろ移民（ディアスポラ）に通じるものがある。両者は生まれ育った異郷の地で民族の故郷と個人の故郷という二重のアイデンティティに揺れているのである。さらに二世は三世をも視野に入れて、アイデンティティの構成要素を主体的に取捨選択、組合せながら、自らの文化的スキーマの構築し人生を築こうとしたのではなかろうか。

以上の視点を軸に、本論では日本統治時代の台湾に生を受け、台北帝大卒業後は高等女学校の教師として皇民化教育に尽力しながらも、終戦まで台湾を題材に執筆活動を続けた新垣宏一を取り上げる。決戦下の当時、台湾文芸家協会を基盤に西川満が『文芸台湾』（1940. 1.）を発行、それを離脱した台湾人作家が『台湾文学』（1941. 5.）を発行、さらには「文学奉公会」により両結社が廃止され『台湾文芸』（1943. 11.）に統一された。この変動期に、まるで自分たちは第三派とでも言いたげに「第二世の文学」（1941. 6. 『台湾日日新報』）を二日に分けて投稿している。初日の冒頭「ようやく第二世の天下になったようだ。（中略）第三世だってひょっとすると大学生になっているかもしれない。こう考えると甚だ愉快である。」と始まり、内地の渡り者には「台湾を愛する情緒の湧くはずもない。」で閉じている。これは、虐げられてきた移住者の心境の暴露である。この投稿は、台湾という植民地社会では内地と外地の文化的統合が、政治的統合の枠外で進んでいたことを物語っていると言える。この「第二世の文学」論を中心に、日本人の彼が、台湾という外地において、どのように認知や行動のあり方を構築したのかを見ることで、如何に「同化」「調節」を図っていたのかを浮き彫りにする。

**Shaping Japan's Southeast Asian Studies:
French Influence on Matsumoto Nobuhiro in the 1920s and 1930s**

Petra KARLOVA (Palacky University, Assistant Professor)

Western influence played crucial role in founding and developing many modern disciplines in Japan. This fact can be illustrating by the case of ethno-historian Matsumoto Nobuhiro who became co-founder of Southeast Asian studies in Japan in the 1930s. He has been influenced by French historians through his Japanese teachers during his studies at Keio University. Then, he received direct guidance by French sociologists and ethnologists during his doctoral studies at the Sorbonne University in 1924-1928. The impact French ethnology and sociology on Matsumoto's work was long-lasting and thus played important role in shaping Southeast Asian studies in Japan. Therefore, paper will explore how French scholars influenced Matsumoto's writings in the 1920s and 1930s.

The importance of French scholars for development of Matsumoto's Southeast Asian studies have been already pointed out by Ito, Hirafuji and Matsumoto Hiroo. However, Ito's and Matsumoto Hiroo's writing only described the history of Matsumoto's relations with French scholars. Hirafuji did discuss how French sociology influenced Matsumoto's research, but her study only covered some aspects of this influence. For this reason, this research will continuously shed light on how French scholars contributed to the formation of Matsumoto's research of Southeast Asia in the 1920s and 1930s.

The study will be divided in three parts. First, it will examine Matsumoto's inspiration by French evolutionist scholars in his study of ancient culture in the 1919-1923 when he was influenced by historian Eduard Chavannes and ethnologist Marcel Granet. Second, it will analyze impact of sociologist and diffusionist ideas of French famous scholars on Matsumoto's work on Japan's relations with Southeast Asia in 1924-1928. It means mainly the influence by Marcel Mauss, Marcel Granet and Jean Przylusky from the French School of Sociology. Finally, it will explore how the above influences formed Matsumoto's ideas on Southeast Asia in 1929-1939. The final part will show that diffusionist influence prevailed in the 1930s although Matsumoto was attracted to the evolutionist and sociologist theories of the French scholars.

沖縄本島における梵字碑の分布と固有信仰との関わりについて

森下一成（東京未来大学・教授）

はじめに

沖縄本島では、集落祭祀・祖先祭祀において固有信仰の影響が見受けられるが、仏教の受容も垣間見られる。琉球王国時代の仏教の伝来は、日本本土（以下、「内地」）ほど早くなく、『琉球国由来記』によれば13世紀に一人の僧が漂着したことによるが、本格的な仏教の受容は、内地から真言僧・頼重法印が渡来し、勅願寺が建立された1368年といえるだろう。

1 研究の背景

勅願寺は建立されたものの、固有信仰をもとにした祭政一致政策を採用する琉球王国では、仏教は、王国民に広く浸透したわけではなく、支配層の一部に広がっただけだった。内地では近世期に幕政によって寺請制度が確立したが、薩摩藩によって琉球王国が支配下に置かれた後も王国内で寺請制度を実施することはなかったため、いわゆる「上からの浸透」もはかられることはなかった。

2 研究の目的

そのような背景があるにもかかわらず、集落の公共空間に梵字碑が存する例が少くない。梵字碑とはサンスクリット語（梵字）によるマントラ（真言）が刻まれたモニュメントであり、集落祭祀の一環としてこれを礼拝対象とする集落もある。内地における神仏習合のように固有信仰と仏教との理論的融合が図られたわけではないにもかかわらず、また非支配層による仏教信仰がそれほど広がりを見せなかった琉球・沖縄において、なぜ固有信仰施設と共存でき、また現在も排除されることなく存置されているのか。それを明らかにすることが本研究の目的である。

3 研究の方法

梵字碑に刻まれている文字は仏教のなかでも真言宗によって唱えられるものが少なくない。それゆえ本研究では真言宗と固有信仰との関わりに着目する。研究の方法としては、特に両者の儀式、固有信仰においては集落祭祀における祭儀過程、真言宗においては行法の過程、それぞれを比較しながら近似する点を探ることを出発点とし、文献調査をもとにしながらフィールドワークを実施する。

以上

<主たる参考文献>

外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』角川書店 1997

比嘉朝進「沖縄の梵字碑」『南島史学（27）』南島史学会 p48-62 1986

テキストマイニング技術の比較文化リテラシーへの応用 一言語情報の感情分析を応用して

落合由治（淡江大学日本語文学科・特聘教授）

第三世代の AI 技術の発展で、自然言語処理も従来のレベルから次第に新しい領域へのアプローチが行われ、実社会にも進出している。テキストマイニングもその一つで、2000年代までは、言語の統計的処理を中心としたアプローチで計量言語学的手法のひとつと見られてきたが、その後の自然言語処理の発展の中で、従来の量的指標の分析にとどまらず、それを近似的に質的指標に接近させることが可能な技術が社会的にも広く普及するようになってきた。現在、Google、Microsoft、Amazon を始め、日本の情報関係産業でも自然言語処理の API などの中に、テキストマイニングが標準で装備されて、資料の中から重要点を読み取る要点抽出等に使われるようになってきている。

しかし、これらの技術は元々、言語資料をただ量的データとして処理するだけで、読み取ることを全く重点にしていなかった理科系の情報技術の視点で開発されているため、ともすればすでに人間の言語能力を AI がすでに越えているなどの、誇大宣伝の元にもなっている。また、言語観として多様な視点が可能という点も等閑視されて、機械的論理的にすべての意味は処理できるという前提がやはり存在している。人文系の視点で見ると、果たしてそのような視点で元々質的な対象である言語を理解できるのか、躊躇せざるを得ない。大事なものは、限界を知って何ができて、何には適さないのかを明確に見極めていくことであり、その意味では、限界を知ることが現在、最も重要であろう。今まで発表者は、勤務先の文学研究者とともに、人文系でのテキストマイニングの応用方法について試行錯誤を行ってきた。その結果、限界にあたるどころが、文章の質的構成の差異にあることが浮かんできた。テキストマイニングは、評論、記事、批評、意見など所謂、話し手の思いを述べる文章では正確に要点を抽出するツールになりえる。しかし、その他のたとえば小説や詩などの文章ジャンルでは、そのままでは使用には適さない。¹

今回は、比較文化リテラシーの応用として、日本と台湾の同一テーマでの評論、ニュース記事また、文学、歴史作品を対象にしてテキストマイニングを行い、資料から読み取り可能な文化要素や異文化的背景知識などがどの程度、明らかになるか比較してみたい。特に、今まで広く使用されてきた語彙頻度、対応分析、共起ネットワーク分析などの量的手法に加えて、質的特徴の理解に応用できる潜在的意味分析と感情分析を導入し、資料の質的読解を試み、現在のテキストマイニング手法で何ができて、何には適さないかを明確に見極め、同時に、従来の言語類型論と異なる言語の表層的差異を越えた文章構成的制約の共通性の存在には、言語とは何かを考える大きな潜在的問題があることを示唆したい。

¹ 落合由治（2020）「日本語テキストマイニング技術の応用可能性—台湾における日本語教育の次のステージを求めて—」『比較文化研究』140pp. 1-12、落合由治（2020）「日本語関係人文系研究の質的研究におけるテキストマイニング手法の応用と課題」『台大日本語文研究』39pp. 101-130 参照。

研究室における大学院中国人留学生の人間関係について

張悦然（九州大学・大学院生）

日本における留学生の中では、中国人の数が最も多く、その中で異文化での適応問題を抱えている者も多い。留学生の異文化適応に必要な側面に関しては、今野・渡邊・譚（2011）は留学生の異文化適応に影響する要因に関する先行研究の知見を整理し、在日留学生の適応に影響する要因は属性的要因，対人的要因，動機づけ要因，自己概念，文化的要因，自己の能力に関する認知であると指摘している。その中で対人関係は異文化適応性に重要な影響を及ぼす要因であり、対人関係に関わる問題が留学生のストレスの上位を占めると述べている（今野・渡邊・譚，2009）。

本研究では、大学院中国人留学生の研究室の人間関係に注目する。研究室の人間関係に焦点を当てる理由は、これが留学生にとって深刻な問題だからである。留学生が日本に来る第一の目的は学位取得であり、研究室の人間関係が学生の学業や研究に最も影響し、大学院段階の満足度にも影響している（小川・小野寺，2016）。また、大学院中国人留学生に焦点を当てる理由は二つの側面に分けて述べる。大学院留学生に焦点を当てる理由については、研究を主とする大学院生にとって、彼らの来日目的は主に学習、研究、論文の作成、学位の取得である。そのため彼らは日本でのほとんどの時間を家や学校で過ごし、接触している日本人もほとんどが校内の指導教員と研究室の学生であるため、学校生活の人間関係ネットワークは主に研究室にある。中国人留学生に焦点を当てる理由については、第一に、日本で学ぶ中国人留学生は全体に占めている割合がもっとも多い。第二に、研究者（筆者）は中国語話者であり、中国の文化を知っており、対象者とスムーズにコミュニケーションができる。それに同じ国の出身である安心感も期待でき、自由に話しやすい。第三に、留学生の適応研究を行う際に、すべての留学生を対象にするのではなく、一国の留学生に限定した研究であれば、文化的要因をコントロールすることができる（今野・渡邊・譚，2009）。

本研究では、実際に中国人留学生が研究室内で指導教員やスタッフ、他の学生とどのような人間関係を持っているのかを明らかにする。また、どのような要因が人間関係を促進し、阻害するのかを検討することが目的である。本研究で10名の中国人大学院留学生にインタビューを行い、M-GTA という質的分析法を用いてデータを分析した。結果として、研究室における大学院中国人留学生の人間関係を「日常の人間関係」、「研究会での発言の積極性」、「研究で指導教員と留学生との関係」という三つの側面に分けられ、それぞれの結果図に沿ってプロセスのストーリーラインを述べる。最後に、中国人留学生の研究室における人間関係の問題に対する解決方法を、留学生側と日本人側の双方の視点から述べる。

森鷗外『雁』と『金瓶梅』の比較研究

丁 若思（京都橘大学大学院文学研究科 博士後期課程 1 回生）

森鷗外『雁』は明治44年9月から大正2年まで雑誌『スバル』に連載されたが、その後中断。その後、結末部分が書き加えられ、大正4年5月靱山書店から単行本として発表された。高利貸し末造の妾であったお玉が東大生の岡田に惹かれはじめ、やがて岡田に今の境遇から救ってもらいたいと強く願いはじめるものの、結局岡田はヨーロッパに旅立っていくというのがこの作品の大まかなあらすじである。作中には友人から借りた『金瓶梅』を読んでいた岡田が、ぼんやりと散歩をしていた際にお玉の家で蛇退治をすることになり、直接面識を得ることになったエピソードが記されており、従来の研究においては、このような作品の内容を踏まえ、中国の長編小説『金瓶梅』との影響関係が指摘されてきた。たとえば三好行雄は「潘金蓮のヒロイン。武大郎の妻で絶世の美女。西門慶を愛して夫を毒殺した。この三角関係を、武大郎＝末造、金蓮＝お玉、西門慶＝岡田に見立てたもの」であると論じている。『金瓶梅』は中国、明の万暦中期、16世紀の終わりに書かれた長編小説である。蒸し餅の行商人、武大郎の妻、潘金蓮が、高利貸し西門慶と密通し、夫を毒殺してしまうというのが、第1回から第5回のおおまかなあらすじである。たしかに『雁』と『金瓶梅』を比べた場合、いずれも三角関係が描かれていると言え、三好の指摘するようにそれぞれの作品に登場する人物の役割についても対応関係にあると言える。しかし、従来の研究では、『雁』と『金瓶梅』の影響関係については指摘されるに止まっており、いまだ作品の内実そのものに関する詳細な比較検証はなされていないのも事実である。

今回の私の発表は両作品の影響関係の内実を明らかにしていくところに目標がある。そして、結論から先に言えば、両作品を比較検証していくことで、鷗外は『金瓶梅』を受容する過程において、大きな改変を加えていることが見えてくるのである。

両作品を比べた場合、もっとも異なっている点、つまり鷗外が大幅な改作を加えた点は、『金瓶梅』の金蓮が夫を殺すことで自分の欲望、利己的な幸福を実現しているに対して、『雁』の場合、今の境遇から救われたいというお玉の願いが、岡田の留学によって挫折している点である。『金瓶梅』は社会の安定期を舞台としていることで、時代背景が作品世界に影響を及ぼすことはなく、個人の欲望や官能、反道義性にのみ焦点が当てられる形で、作品世界が構築されている。一方、『雁』の場合、前近代から近代へ、江戸から明治へ、という時代の転換期を背景として背負っている。結果、個人の内面のドラマから、個人の生を翻弄する明治の現実に物語の焦点が移行している。文明上の転換期にあって、勝者は高利貸し（『雁』の末造、『金瓶梅』の武大郎）や情婦（お玉や金蓮）ではなく、新しい時代の要請に応えうる人材としての岡田であったのであり、ここに時代の安定期を背景とする『金瓶梅』との根本的な違いがあったのである。

山崎豊子『大地の子』論 —典拠『天雲山伝奇』との比較—

唐 楚輝（関西大学大学院 博士後期課程）

山崎豊子の『大地の子』（『月刊 文藝春秋』1987年5月号～1991年4月号）は、山崎が106冊もの文献資料を参考にし、執筆した長篇で小説である。ただ、これまでの先行研究では、106冊の文献資料を精査し、研究したものはほとんどない。そこで、本発表では、106冊のうちの1冊にあたる、現代中国において「反思文学」の代表作と見なされている魯彦周の中篇『天雲山伝奇』（初出：『清明』創刊号、1979年7月）をとりあげ、『大地の子』と比較研究する。さて、比較するにあたって、中国語で発表された『天雲山伝奇』ではなく、山崎豊子が実際に資料として用いた和訳本（田畑光永、田畑佐和子訳編訳、亜紀書房、1981年）を用いる。

『天雲山伝奇』と『大地の子』を照らし合わせて読めば、次のような両作品の共通点が分かる。『天雲山伝奇』に登場する女主人公の宋薇は、元恋人の羅群が夫に嵌められ、冤罪を被ったことを知り、夫の妨害を顧みず、元恋人を救ったというストーリーが記されている。山崎豊子は『大地の子』を執筆する際、そのストーリー展開を参考にした。より、具体的に説明すると、『大地の子』の女主人公の趙丹青は、元恋人の陸一心が、趙の夫に無実の罪を着せられことに気付き、その不正を暴き、陸一心の名誉を回復させたというプロットを取り入れたのである。要するに、『大地の子』のストーリー展開、及び女主人公の役割は『天雲山伝奇』とかなり酷似している。

先行研究は、両作品の類似性を言及した。しかし、山崎が『天雲山伝奇』を典拠として、如何なる要素を自身の創作に取り入れたのか、また、どういった加筆をして、独自性に富んだ作品を創り上げたのかを検討したものはない。

以上をふまえ、本発表では、山崎が、原典である『天雲山伝奇』を元にして、どのように加筆し、新たなオリジナル作品『大地の子』を生成していったのかを検討する。検討にあたって、まず『大地の子』の内容を『天雲山伝奇』と比較し、両者における人物間の関係、女主人公な役割などの共通点、及びストーリー展開、女主人公の造形などの相違点を確認する。さらに、相違点を深く掘り下げて分析し、『大地の子』のオリジナリティの様相を考察する。

AI 技術のテキストマイニングによる村上春樹文学研究 ——『1Q84』論をより総合的に構築することを目指して——

曾秋桂(淡江大学 教授)

文学研究においても、21世紀を生活している人々のあらゆる生活様式を転覆させられるほど、莫大な影響を与えているAI(人工知能、Artificial Intelligence)技術との協働をしなければならない時期に来ていると思われる。なぜなら、AI時代においては、ありとあらゆる分野の学術的研究、実用的開発が人工知能との関係は、生き抜くためにはどうしても避けては通れない重要課題だからである。AI時代を先取りし、その必要性を強く意識した上で、論者は近年文学研究でよく使われたテキスト分析の方法と、AIのテキストマイニング技術の応用方法との間を行き来する方法論的な補い合い・協働を目的に、『献灯使』などの原発文学作品と、『コンビニ人間』などのエコフェミニズム文学作品を対象にして、AIのテキストマイニング技術を応用した研究成果を積み重ねてきている。また『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』、『一人称単数』など2010年代以後の、村上春樹の作品を取り上げて考察してきたが、AIとの方法論的な補い合い・協働は確かに文学研究においては有効だと証明できたと言える。

その有効性とは、作者あるいは論者と共通記憶を持っていないAIのテキストマイニング技術により、物語の新たな主題が判明し、実体験談としての読みが可能になることである。そして、テキスト分析の方法だけを頼りにすれば、表層的な部分だけに光があたってしまうが、テキストマイニングを補助的に使えば、さらなる潜在層が浮き彫りにされ、文学作品の読みが多様化になる。『コンビニ人間』のように、AIのテキストマイニング技術による解析結果が主人公古倉よりも脇役の白羽の方に近づいているため、従来の文学読みと正反対な読みが提示され、AIのテキストマイニング技術を活用した文学研究が興味深くなる。

今回は、上述の文学のテキスト分析とAIテキストマイニング解析との協働という方針に従い、今まで取り扱った2010年以後の村上春樹の作品からさらに遡り、『1Q84』(BOOK1、2、3、新潮社、2009-2010)を研究対象に村上春樹文学研究の体系作りを目指して、考察することにする。AI技術の応用は、『1Q84』全体のワードクラウド及び各品詞のワードクラウドの制作、LDA(トピックモデルによる統計的潜在意味解析、Latent Dirichlet Allocation)によるトピックモデル解析、googleのオープンソースツールword2vecによる単語ベクトルの相関性の判明、共起ネットワークによるクラスター分析、AI技術¹を援用したBOOK1、BOOK2、BOOK3の持つ感情スコア分析と感情変化分析を用いる。このように、文学のテキスト分析と合せて、『1Q84』論をより総合的に構築していく所存である。

¹ <https://qiita.com/yukinoi/items/46aa016d83bb0e64f598> (2021年4月30日閲覧) 日本語評価極性辞書を利用したPython用Sentiment AnalysisライブラリOsetiを用いた。

村上春樹『一人称単数』における記憶と生活

葉 凌（淡江大学・助理教授）

短編小説集『一人称単数』（2020年・文藝春秋）は、1979年にデビューした村上春樹の最新作（2021年6月現在）である。収録された八つの短編は、書き下ろしの「一人称単数」以外、『文學界』の初出である。しかし、『新潮』1999年8月号～12月号連載の『神の子どもたちはみな踊る』（2000年・新潮社）、『新潮』2005年3月号～6月号連載の『東京奇譚集』（2005年・新潮社）とは違って、『一人称単数』の七つの短編の初出は同年の連作ではない。それにも関わらず、『神の子どもたちはみな踊る』における「地震」、『東京奇譚集』における「奇譚」といった各短編を繋ぐ言葉が存在するように、『一人称単数』は「記憶」という単語によって結び付けられている。要するに、一人称の語り手は自分の過去の「記憶」を語るなのである。「できるだけ素敵な記憶をあとに残すこと——それが何より重要になる」（『ヤクルト・スワローズ詩集』より）とあるように、語り手が「記憶」を大事にすることが分かる。これは『猫を棄てる 父親について語るとき』（2020年・文藝春秋）で父親との「記憶」を全面的に語る作家・村上春樹を想起させる。また、「『一人称単数』に収められた八つの短編は、それぞれ意識的・意図的に作家村上春樹の事実と戦略的に重ねられて一見私小説風に仕立てあげられています」¹と言われるように、『一人称単数』は「語り手＝作家・村上春樹」による作品のように見える。こうして、作中における「記憶」は作品の構造的にも、内容的にも各短編の共通項として関連づけられていると考えられる。

また、『騎士団長殺し』（2017年・新潮社）など非現実的な人物が登場する作品とは違って、『一人称単数』は日常生活をまつわる物語である。しかしながら、日常生活には何らかの異常が存在する。例えば、「品川猿の告白」における、人間の言葉が話せる猿である。語り手の「僕」はこういう日常生活における異常によって、新しい自分を発見することができた。『一人称単数』は細やかな日常生活からの異常に対する「記憶」を語ることによって構成された作品だと考えられる。こういった「記憶」は生きるための熱源として語り手の残りの人生を支えるものとなる。デビューして40年超えた村上春樹の作家生活を支える力とも見做されよう。

¹ 田中実（2021）「無意識に眠る罪悪感を原点にした三つの物語——〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を棄てる 父親について語るとき』と『一人称単数』、あまんきみこの童話『あるひあるとき』——」『都留文科大学大学院紀要』（25）都留文科大学 P21

横溝正史「双生児」論

黄如萍（国立高雄餐旅大學応用日語学科 准教授）

横溝正史「双生児」は、昭和4年(1961年)、雑誌『新青年』2月号増刊号に発表された短編小説である。

本作はこれまでの研究史の中ではそれほど多くの注目を集めてきたものとは言えないが、その数少ない研究においては、主に他作品との関連の中で論じられてきた。この二つの作品の関係については、夙に鮎川哲也が横溝正史の「双生児」の「解説」¹において「江戸川乱歩氏の《双生児》では、入れ替わった弟が細君に少しも怪しまれずに結婚生活をつづけたことになっているのだが、本篇の作者はそこに疑問を感じたのではないだろうか。夫に密着していた妻である以上、外形は夫にそっくりであってもなにかにつけ違和感を覚え、怪しみだすのが自然だ。江戸川氏も作中でしるしているように、特に閨房において発覚する公算が大きいはずである。作者はそこに焦点をあて、疑惑を抱いた妻に視点をおいて、物語をふくらませていった」と江戸川乱歩の作品「双生児」との類縁性を指摘しているのが代表的である。また、日下三蔵が、『怪奇探偵小説傑作選2 横溝正史集』の「解説」において、「「双生児」の冒頭には「A sequel to the story of same subject by Mr. Rampo Edogawa」の一文が掲げられ、乱歩の同題作品「双生児」(『新青年』大正13年10月号)に触発されて書かれた作品であることを明らかにしている」「本篇を楽しまれた方は、ぜひ、乱歩作品の方も、併せてお読みいただきたい」²と、この二つの作品の関係性を指摘している。

以上のように、横溝正史が自らの作品に探偵小説家江戸川乱歩の作品名を挙げているため、研究史ではそれをもとに、横溝正史と江戸川乱歩との関係が論じられてきたものだと考えられる。横溝正史の創作行為では、江戸川乱歩の作品を意識していると言えるのであるが、何故あえて江戸川乱歩の同題作品「双生児」でなければいけないのか。したがって横溝正史と江戸川乱歩作品における摂取の問題について、いまだに考察の余地は大きい。本論では、横溝正史の「双生児」という小説全体の構造・仕組みを検討した上で、他作品との関係性や、そこから摂取した主題に注目して読み解いていきたい。論証方法としては、まず、「私」による語りの構造に着目し、本作品の仕組みを捉え直すことを試みる。続いて、同様の性格を持つ他作品と共通した要素を探りつつ、横溝正史における「双生児」の文学的位置を考えることとする。

¹ 『怪奇探偵小説集(Ⅲ)』鮎川哲也編、双葉文庫、昭和59年10月

² 横溝正史著、日下三蔵編、筑摩書房、平成13年3月

日本語自然会話における「話者間反復」に関する予備的考察

常艶麗（山口大学東アジア研究科）

日本語自然会話においては様々な反復現象が見られる。まず、反復される要素の言語単位によって分類すると、大きく形態素、語、句、文の反復がある。また、異なる話者間のやりとりで起こる反復と、自身の発話内での反復もある。その中でも、直前の発話にすぐ続いて反復するものと、離れて出現するものに区別される。そのほかに、反復の形によって、ほぼ同じ形での反復と、反復が起こる際に何かをつけ足したり、言い換えたりするなどの異なる形での反復も現れる。これらの反復現象は従来一括して研究されてきた。しかし、中には全く現象が異なるものもあるため、それらを厳密に区別して扱う必要がある。そこで、本稿では以下のような、ある話者の発話の末尾部分が、次の話者の初頭部分に繰り返される現象（下線部参照）を「話者間反復」と呼ぶこととし、これを対象とする。これは話者をまたいだ反復であり、話者Bの発話にすぐ続いて、語が反復されている。

(1) B: シャツ, シャツ, ジーパンもまあ同じやし

A: ジーパン毎回洗ってるの?

従来の反復現象に関する研究は、主に反復の機能を探究するものであった。その中で、メイナード(2005)は、ある要素はトピックとして取り上げられ、繰り返されると述べた。しかし、トピックでない要素が反復されることも見られる。そうすると、なぜ特定の箇所だけが反復されるのかという問題については、十分な解答が得られない可能性がある。

そこで、本稿では、日本語自然会話を対象とし、先行発話のどの要素が選択されて話者間反復が起こるのかという問題を解明することを目的とする。そして、反復される要素が選ばれる際に、制約があるのか、どんな制約条件があるのか、制約同士はどういうふうに相互作用しているのかを見ていくことを目指す。

その結果、反復される要素が選ばれる際に、統語的な制約として、相対的に文末に近い位置に現れる要素が選ばれるということを明らかにした。のみならず、統語的制約が働くとともに、形態的、意味・機能的な制約も共同作業している。この三つの制約が同時に働くことで、反復される要素を選択することになる。そして、この三つの制約に優先順位がつけられたことで、制約同士の関係も判明した。

言うまでもなく、先行研究の示す意味や機能の観点が全く関連しないとは言えない。例えば、前述したように、トピックであれば話者間反復が起こる可能性は高い。しかし、このことは不十分である。話者間反復という現象が、意味や機能しか関わらないのか、それとも他の制約が存在するのか、先行研究では明らかではない。本稿を通して、話者間反復に関わる制約を探ることを試みた。この点で、本稿での形態的、統語的、意味・機能的な観点からの記述は、少なくとも意味・機能的アプローチを補うものであり、それゆえ非常に意義があるものと考えられる。

Flat Stanley Project を活用した英語教育の可能性

東本 裕子（横浜商科大学 准教授）

本研究は、異文化理解促進プロジェクトとして評価の高い Flat Stanley Project を英語教育へ活用し、コロナ禍の移動を伴う国際交流が困難な状況の中で、学生の自文化・異文化理解と、英語による自己発信、コミュニケーションへの動機づけへ繋げようとする試みである。また、英語教育を通じた学習者の自己肯定感の向上を、L2 self としての自己表現を通して実現することを目的とする。

Flat Stanley Project は、アメリカ人作家 Jeff Brown の絵本 Flat Stanley を基に、カナダ人の教員 Dale Hubert が 1995 年に開始した教育プログラムである。参加者は各自が作成した Stanley を海外の交流相手へ郵便で送り、様々な異文化体験や交流を双方向で進め、異文化間の相互理解を深める内容となっている。

本発表は、異文化理解と英語コミュニケーションを研究テーマとするゼミに所属する 12 名の学生が、韓国の建国大学と中国の河北工業大学の学生とそれぞれ交流を行った結果をまとめたものである。コロナ禍の郵便事情に配慮し、本来とは異なる交流スタイルを工夫した。各国の学生は自分の作成した Stanley を使い、メールによる交流と並行し、同期型学習として Zoom を使用し授業内で交流を深めた。また、ブレイクアウトルームも併用し、少人数での英語、日本語による自己表現、自文化紹介の時間も準備した。時差の大きなアメリカや南米チリの学生とは授業時間内での交流が困難であるため、双方の学生が時間を調整しやすい夏季休暇に同期型交流を実施する。

Stanley という所謂アバターを利用した国際交流は学生にとって新しい試みであったが、英語を使用言語とするということに加え、自分とは別のキャラクターによる発信という特殊性に因り、学生にとって普段とは異なる ideal L2 self として自己表現をする機会となった。また共通の関心事である「コロナ禍の生活、ニュー・ノーマルな大学生活」のトピックにより、初対面にもかかわらず共有できる思いがあったことも交流を円滑に進める助けとなった。

建国大学との同期型交流実施後のアンケートで、双方全員の学生が定期的な交流の継続を希望しており、夏季休暇中の相互仮想ホームステイプログラムの準備を現在進めている。事前に顔合わせを行い、相手の興味・関心を把握したうえで受け入れる Stanley の滞在予定を計画する。今回の交流により新たな視点で自文化の魅力を発見し紹介しようという気持ちと共に、交流相手の文化に対する興味が学生に芽生えたことも喜ばしい結果である。英語による自己表現の楽しさと達成感を再確認し、継続的な交流のために英語学習へ意欲的に取り組むゼミ生が増えたこと、またコロナ収束後に対面交流を実現させたいという全ゼミ生共通の目標ができたことも収穫となった。

「漢語形容動詞副詞形に+動詞述語節」と 「漢語名詞で+動詞述語節」との構造についての分析

陳 志文（国立高雄大学・教授）

筆者は日本での留学生生活を終え、台湾へ帰国する時、友達から「帰っても元気でお過ごしくださいね。」と言葉をかけてもらったという記憶がある。しかしながら、日本語教育の現場では、「形容動詞」は常に語尾を「に」に活用すれば副詞形になり、動詞を修飾することができるかと教授している。「元気」という言葉はふつう「形容動詞」と判断されるため、なぜ「元気にお過ごしください」ではなく、「元気で過ごしください」となったのは興味深かった。実際、我々の日常生活においても下記のような例文を目にすることがある。例えば、以下の例（1）と例（2）では、「本気」という漢語が示したように「名詞、形容動詞」両方の品詞を兼ねている漢語には、時には「形容動詞に+動詞述語節」、「名詞で+動詞述語節」の二通りの連用修飾を有することが分かる。言ってみれば、「本気に」のみならず、「本気で」も同じく「怒っている」という動詞を連用修飾することができるということである。

(1) 足に履くものを私にかぶせるなんて！！」ルナ表情のわかりやすい子だ、本気に怒ってる。だけど、足に履くものをと怒ってるけど、あんたは私の顔の上を堂々と歩くじゃ……（『Yahoo!ブログ』2008）

(2) いつまでもこんなことが続いたら、入院させるよ。どうする？」
本気で怒っている先生の言葉を聞いているうちに、涙があふれた。「すみません。もうしません」（『極道の女房』斉藤時子 2002）

こうした漢語の語彙の一部は「形容動詞副詞形に+動詞述語節」という形が多く用いられるのに対し、「名詞で+動詞述語節」という連用修飾の構造も少なくなく見られる。一体どのような漢語には、主に「形容動詞に+動詞述語節」といった構造が用いられるのか、どのような漢語には「形容動詞で+動詞述語節」といった構造がより多く用いられるのか、あるいはどのようなものが両方とも平均的に用いられているのか、ということに関して明らかにしたい。さらに、こうした二通りの連用修飾構造における異質性と同質性を見分けることを目指す。

研究方法としては本研究では、「名詞、形容動詞」の品詞を兼ねている「二字漢語」に着目し、まず、国立国語研究所によって公開された「現代雑誌 200 万字言語調査語彙表」（2006 年）という資料を用いて、上位使用頻度 50 以上の語彙をすべて選び出す。次に「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（以下 BCCWJ と略称する）というコーパスから、「○○に+V」と「○○で+V」の例文を洗い出し、その連用修飾構造を比較検討する。

英語教育の中で取り上げるべき異文化の具体例

小山内大 (東京電機大学 教授)

私の口頭発表はタイトルにあるように、英語習得にとって学習者に直接役に立つ2つの言語圏の文化の差異を具体的例と共に示すことである。特に海外に一定期間留学・滞在経験のない英語教員に、理解して頂きたい文化及びそれを反映した語彙の使用及び表現の違いに重点を置いて、生徒の異文化理解が英語習得に直接役に立つと思われる事項を纏めてみた。この発表で扱うのは、下記の1～3の事項以外に4) 日本語の素晴らしい曖昧性 5) なぜ日本人はカタカナ語を多用するのか?の5つのトピックについて、筆者の16年に及ぶアメリカ滞在で経験した具体例と共に紹介する。

1) 褒め言葉の違い: 英語文化と日本語文化においては相手を褒める観点が異なる。これはそれぞれの文化において社会的にふさわしい人物像が異なる顕著な現れであり、授業において事あるごとに強調しておくべきである。英語では *on the (go/move)* = 絶えず行動している、*go getters* = 自ら行動して夢を叶える人物、*"shaker and mover"* = 自分で物事を始め、成し遂げる、*aggressive* = 攻撃的・積極的、*"having one's way"* = 自分自身のやり方を持っている等等、「積極性・行動力・独自性・自発性」などが褒め言葉として男女を問わず使われるが、日本では、「穏やか」*"calm and gentle,"* 「協調性がある」*"harmonious"* (J. Israel 2018) *"cooperative,"* 「まじめ」*"sincere"* 「身の程をわきまえている」*"knowing one's limit,"* 「努力家」*"a hard worker"* 等々、英語圏で好ましいとされる人物とは、かなりの相異点があり、英会話の中では常に念頭に置いておく必要がある。

2) 表現の具体性: 英語は日本語に比べると極めて具体的に表現する言語である。例えば、日本語で1) 「切る」に相当する英語は少なくとも4つあり、日常会話において常に使い分ける必要がある。例えば「横に長く細く切る」は *slice*、「ぶつ切り」は *chop*、「角切り」は *dice*、「みじん切り」は *mince* と言い分けることが必要である。2) 日本語では単に「焼く」という表現も英語では厳格な区別がある、「ケーキやパンを焼く」は *bake*、「網で焼く」は *grill*、「卵を焼く」は *fry*、「オーブンでじっくり焼く」は *roast* と表現する。

3) 英語では「男らしい・女らしい」は社会的に死後である: 日本語は世界的に見ると男女の違いを明確に区別する言語だが、現在の英語圏では男女を区別するのは *politically correct* ではないという考えが支配的であり、男性・女性の区別を好まない風潮は言葉の使用についても顕著に表れている。例えば「男らしい」は日本語では男性を褒める時に頻繁に使用されるが、これに対応する英語「*manly*」は、現在ではほぼ使用されない。時として使用される場合は、*toxic* (有害な) という意味で使用されることが多い。また「女の子らしい」という日本語では多用される表現に対応する英語は *girly/girlie* だが、この単語も今ではほぼ使われず、逆に軽蔑別的な含み "*dumb*" や "*intellectually lightweight*" という意味で使われる場合が多い。

日本語と中国語の畳語についての一考察

-基本色彩語を中心に-

郭麗（東北大学 大学院生）

畳語とは「人々」、「知らず知らず」などのような同一の単語を重ねて一語とした複合語であり、語の意味を強めたり、事物の複数、動作・状態の反復・継続などを表す。日本語の畳語はオノマトペとして使われていることが多いが、色彩に関する畳語についての研究は少ない。本研究では日本語と中国語の色彩畳語を取り上げ、それぞれの形態的特徴、使用実態、および相互翻訳の特徴を明らかにしたい。考察の結果は以下の通りである。

まず、両言語の色彩畳語の形態的特徴については各種の辞書を調べたところ、日本語の場合では、完全畳語（例：あおあおなど）と比べて、部分畳語（例：しらじらなど）の方が多い。中国語の場合では、ABB型（例：黑乎乎など）の色彩畳語の種類は他のパターン（AA、AABB、ABABなど）と比べて圧倒的に多いことが見られた。

そして、日中両語の色彩畳語の使用実態の調査には、日本語の場合では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（中納言版）を使用し、中国語の場合には『CCL 语料库检索系统』を使用した。その結果として、中国語と比べて、日本語の色彩畳語の全体的な使用頻度は高くないが、中国語ではABB型の色彩畳語の使用頻度は最も高いと分かった。

最後に、日中両語の色彩畳語の相互翻訳について、『日中対訳コーパス』（第一版）を調べ、具体例を一つ一つ分析してみると、その翻訳手法を①色彩語畳語に訳す；②畳語ではないが、対応する色彩語に訳す；③別の色彩語に訳す；④省略する；⑤非色彩語に訳すの5つに分類した。結果は表1と表2で示したように、日本語から中国語へ訳す場合は非色彩語に訳す場合と対応の色彩語畳語に訳す場合が多いが、中国語から日本語へ訳す場合は、畳語ではない対応する色彩語に訳す場合と非色彩語に訳す場合が多いと分かった。

表1 日本語から中国語へ訳される分け（全：61件）

種類	①	②	③	④	⑤
件数	17件	13件	4件	2件	25件
比率	27.8%	21.3%	6.6%	3.3%	41%

表2 中国語から日本語へ訳される分け（全：399件）

種類	①	②	③	④	⑤
件数	33件	181件	0件	30件	155件
比率	8.3%	45.4%	0	7.5%	38.8%

主要な参考文献

陳祥（2020）「基本色彩語の畳語の一考察：コーパスを用いた量的分析」『日本語教育研究』（66），言語文化研究所，p21-42

中国語の助動詞「能」の用法と日本語の対応表現に関する対照言語学的研究

李 善（東北大学大学院国際文化研究科言語科学研究講座・博士後期課程一年生）

1. 研究の背景と研究の目的

渋谷（1993）は、「可能表現は動作主体がある動作を行うことが主体内外の条件によって可能であること、不可能であることを表すのが一般的である。ところが、可能表現はある適切な文脈においては、他の表現と同様にさまざまな語用論的意味を表すことがある。」（p. 49）と述べている。中国語の可能表現の一つとして知られている「能」も同じように、様々なコンテキストに応じ、数多くの意味を得ることができる。その中で、可能表現として可能の意味を表している例が見られる一方、禁止や依頼などの意味を表す例も見られた。一方、日本語との対応関係から見ると、「能」は可能表現の一つとはいえ、それに対応する日本語表現は必ずしも可能表現であるとは限らないにもかかわらず、それを認識できず、「能」を直接的に動詞の可能形または「～ことができる」に対応させる中国人日本語学習者は少なくない。

そこで、本研究は、中国人日本語学習者が誤用を減らし、より自然な日本語を話せるようになるために、「能」の意味・用法を検討したうえで、それに対応する日本語の表現を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法と分析データ

本研究は「日中対訳コーパス¹」を使用し、「能+動詞」のような構文パターンが含まれている中国語の原文およびその日本語の訳文を分析データとして用いる。その後、「能」の意味・用法を検討した上で、日本語の表現との対応関係を明らかにする。

3. 研究の結果

「能」の用法に関して、本研究は先行研究における可能の意味分類を踏まえ、データへの分析に基づき、また「能」における「可能」という意味を可能であることの制約条件（渋谷 1993）が人間（もの）の内にあるか外にあるかにより、「内の可能」と「外の可能」に分けた。さらに、人間（またはもの）の内に存在する制約条件により、「内の可能」を「能力可能」、「心情可能」、「認識可能」、「属性可能」に4分類した。

それから「能」の対応表現についてである。中国語ではひたすら可能の形式である「能」が使われているが、日本語に対応させると様々な表現が見られる。その中で、そのまま日本語の可能表現で対応させ、きちんと意味が伝わる場合もあるが、文法上の間違いになってしまうか、文法上の間違いではないが意味がきちんと伝わらない場合もある。

参考文献

渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33（1），pp. i-262

¹ 「日中対訳コーパス（第一版）」では、日本語の小説36冊とその中国語訳本、そして中国語の小説39冊とその日本語訳本を収録している。

同漢字表記語から見る日台言語文化の異同点 — 「Xラカ」形式形容動詞とそれに対応する中国語を中心に—

頼錦雀（東呉大学・特聘教授）

台日両国の言語では漢字共用という現象があるので、日本語が簡単だと思って日本語を習い始めた者は少なくない。しかし、たとえ同漢字表記語であっても、同形同義語の外に、同形異義語か意味が一部分しか同じでない語もある。台湾における日本語教育的見地から考えてみれば、『約束された場所で underground2』という村上春樹のエッセイが《約束的場所:地下鐵事件II》（頼明珠訳、時報出版、2002）に翻訳されたような、日中両語における漢字表記語の意味の相違を無視した誤用例も見られるので、中国語と同漢字表記語の日本語も指導上、要注意である。本研究では、日本語の「Xラカ」形式形容動詞を対象に、その同根形容詞及びそれに対応する同漢字表記の中国語との異同点を考察したい。

日本・国立国語研究所「現代雑誌 200 万字言語調査語彙表」（2006 年公開）55,223 語における形容動詞 1,408 語のうち、「Xラカ」形式形容動詞は「明らか、麗らか、大らか、清らか、滑らか、高らか、なだららか、誇らか、安らか、柔らか」の 10 語がある。「なだらか、すべらか」を除いた 8 語に同根形容詞「明るい、麗しい、大きい、清い、高い、誇らしい、安い、柔らかい」がある。使用頻度から見た場合、「柔らかく柔らかい」は同順位で、「麗らか麗しい、清らか清い」では、「Xラカ」形式は「Xイ」形式より順位が高いが、「明らか明るい、大らか大きい、高らか高い、誇らか誇らしい、安らか安い」では、「Xラカ」形式は「Xイ」形式より順位が低い。

「Xラカ」形式の同漢字表記の中国語（明、麗、大、清、高、誇、安、柔）から見た場合、孤立語の中国語は文法的機能を表す語尾はないが、膠着語の日本語は「Xラカ」形式もその同根「Xイ」形式も語幹と語尾がある。例えば「高らかな（音）」vs. 〈高（音）〉。品詞別から見た場合、中国語の〈明、麗、大、清、高、柔〉などは〈不及物性質動詞或形容詞〉（趙元任著・丁邦新訳 1980 《中國話的文法》）か〈状態不及物述語〉（中央研究所中文詞知識庫小組《中文書面詞頻率辭典》）と呼ばれているが、日本語では「明らか、麗らか、大らか、清らか、高らか、誇らか、安らか、柔らか」の「Xラカ」は形容動詞である。辞書形で見れば、孤立語の中国語で一つずつ意味を持つ漢字が辞典で項目化されるが、日本語では「明らか、高らか」のように語根と語尾が一体になって項目化される。但し、同根「Xイ」形式形容詞と違って、語尾の「だ」は辞書では表されない。

本研究は台湾における日本語教育支援の一環として、「Xラカ」形式形容動詞を中心に、同根・同漢字表記の形容動詞と形容詞の意味と用法の相違を考察したあと、同漢字表記から見た中国語と日本語の異同点を明らかにしたいものである。

キーワード：「Xラカ」形式形容動詞、漢字表記、同根形容詞、言語文化、台湾、日本語教育

“用”の意味用法に関する考察—台湾華語と台湾語の比較を通じて—

王天保（淡江大学 副教授）

辞書で漢語及び台湾華語の“用”について調べてみると、意味用法が多様であるが、両者は使い方もほとんど同じである。“用”の意味用法には、例えば雇入れを表す“用人”、「意見を受け入れて用いる」という意味で使う“採用”の他に、「使う」を表す“使用”“運用”や、食事をすることを意味する“用餐”といった動詞の用法がある。それに効用、効き目を表す“功用”“作用”や家計や取引などに伴って支払う金銭を意味する“家用”“費用”といった名詞の用法がある。さらに介詞として使われる“用”には手段を表す「用鉛筆寫」というものもある。しかし使い方がほとんど同じといっても、台湾語の“用”の意味用法には、「万能動詞」という現代漢語に見当たらない使い方がある。「万能動詞」の“用”は具体的に、「用意する」「設置する」「処理する」「ある作業を行う」「(髪型を)整える」「いたずらする」といった意味を表すものである。そして、その万能動詞の用法は、台湾語の“用”においても非常に類似した振る舞いが見受けられる。台湾語にも“用”という語彙がある。書き方は台湾華語の“用”と同じであるが、発音は異なる。そして前述した台湾華語における“用”の万能動詞の使い方について、以下の例¹が示したように、台湾語にも同じ用法がある。

- (1) a 用頭髮 (ヘアスタイリングする)
b 用頭髮 (ヘアスタイリングする)
- (2) a 用厝 (リフォームする)
b 用房子 (リフォームする)
- (3) a 用車 (車のメンテナンスをする)
b 用車 (車のメンテナンスをする)

台湾華語の万能動詞の“用”の由来について、“用”は“弄”を“用”に誤用したことから生じた用法であると王(2018)は述べた。しかし万能動詞の“用”の用法は、台湾語でも非常に類似した振る舞いが見受けられるため、その類似性を単なる偶然だと考え難い。また孫・沈(2016)は“用”を用いた構文を対象に考察を行った際に、現代漢語に存在しない“用”構文は台湾語(閩南語)の影響を受けて生じた新しいタイプの台湾華語の構文であると指摘した。つまり台湾華語の言語使用は台湾語の影響を受け変化が生じる可能性があるということである。そのため、台湾華語の万能動詞の“用”の由来について、誤用説だけではなく、台湾華語と台湾語の“用”の意味用法の関連性も視野に入れ考察する必要があると考えられる。本発表は台湾華語と台湾語の“用”の使い方を比較しながら考察を行い、両言語の“用”の用法異同および関連性を明らかにすることを目的とする。

¹ aは台湾語の例であり、bは台湾華語の例である。

駅構内における日本語とインドネシア語の禁止サイン —禁止情報以外の表現の分析—

ムティ・アフィファー（金沢大学大学院博士後期課程）

禁止サインには、「禁煙」や「駐車はお断り」等、ある行為をしないよう命令又は指示する表現が表記されている。しかし、例えば、「駅構内全面禁煙 大阪駅長」や「禁煙おタバコは喫煙室でお願い致します。」といったように、「禁煙」という禁止情報以外に別の情報が記載されているものもある。こういった禁止情報以外の情報を「追加情報」と呼ぶことにする。ムティ（2020）は、日本語とインドネシア語の禁止サインに使用されている禁止表現に限定して調査を行い、日本語はインドネシア語に比べて待遇度の高い表現が使われ、表現のバリエーションも多いことを明らかにした。しかし、上述のように、禁止サインには追加情報が含まれていることが多い。だとすれば、禁止表現の待遇度やバリエーションの多寡は、追加情報の有無や種類と関係している可能性がある。そこで、追加情報に着目して日本語とインドネシア語の禁止サインの分析を実施した。日本語のデータは東京駅と大阪駅で、インドネシア語のデータは首都ジャカルタのガンビル駅とメダン駅で収集した。収集できた 2086 件の日本語データでは、追加情報として「入り口へおまわり下さい」等の「指示」（308 件[14.8%]）、「危険です」等の「理由」（264 件[12.7%]）、「大阪駅駅長」等の「発信者名」（193 件[9.3%]）等が観察された。一方、904 件のインドネシア語データの内、追加情報として記載されていたのは「Denda bagi yang melanggar Rp.500.000,00」等の「罰金」（62 件[6.9%]）、「PERATURAN DAERAH PROVINSI IBU KOTA JAKARTA NO 3 TAHUN 2013」等の「法令」（25 件[2.8%]）等であった。しかし、日本語の禁止サインには 1 つのサインに複数の追加情報を併記するものが多い。例えば、「駅構内での物品の販売、ビラ配布、演説、集会、勧誘、客引き、寄付行為等は禁止します。これらに違反すると鉄道営業法軽犯罪法等により処罰されます。大阪駅長曾根崎警察」には、「罰則」と「発信者名」の 2 種類の追加情報が記載されている。他方、インドネシア語の禁止サインは、ほとんどの場合、1 つのサインには 1 つの追加情報しかない。例えば「DILARANG MASUK KECUALI PETUGAS」は追加情報として「範囲」を限定する「Kecuali Petugas」のみを併記している。これらの結果は、ムティ（2020）の結果と関連付けると、日本語の禁止サインは、禁止情報だけでなく、追加情報も多様であることが分かる。インドネシア語は日本語の禁止サインに比べて、ストレートに禁止情報を提供する。このような違いはどのように説明できるだろうか。民族や言語の多様性の違いという観点から説明が可能なように思われる。

文献

ムティ・アフィファー. 2020. 「日本語とインドネシア語の禁止表現の比較—禁止サインにおける「配慮」をめぐる—」、『日本語用論学会第 22 回大会発表論文集』、207-210.

発信力の向上を目指した英語教育の実践 ～地域の特色を活かした取組を通して～

山崎 祐一（長崎県立大学・教授）

本研究の主たる目的は、グローバル人材の育成の一環として官民協働で取り組んでいる長崎県佐世保市の「英語で交わるまち SASEBO プロジェクト」推進事業が、英語学習者の英語力改善と地域の異文化共生にもたらす効果について検証することである。具体的には、アメリカ文化が歴史的に混在する佐世保市における小中学校の英語学習者の異文化コミュニケーション能力と、英語学習に対する意識の変容や英語による応対の向上を追究し、この地域連携の実践がグローバリゼーションを意識した「実践力のある人材づくり」や「英語による発信力」にどのような影響を与えるかを検証する。また、プロジェクトにおける活動後にフィードバックとして得られる小中学校の英語学習者、教育実践者、保護者、及び外国人居住者の意見や国内外での事例を参考に、英語学習の手法や環境、また、地域における異文化共生のさらなる課題を明らかにし、その有効な解決法を検討する。

新学習指導要領(文部科学省, 2018)は、「英語を使って何ができるようになるか」という座学で学んだ知識及び技能の活用について言及している。本研究の意義、及び期待できる成果目標は、「英語を何年学んでも英語を話せるようにならない」という多くの日本人の究極の問題に焦点を置き、英語学習者の英語による発信力向上を目指すことである。単に学術的成果に留まらず、英語学習の動機づけにつながる可能性について追究し、この研究を県内の英語の学力向上に役立てることである。また、異文化理解と外国語教育の視点から、官民協働の地域連携が、地域と英語学習者双方にとってどのように有益なのかを検証する。

この官民協働の地域連携を基盤にした研究は、異文化接触が絶えない佐世保市にとっては地域の特色を活かした実践研究であり、かつ、市内の小中学校における英語学習者にとって有効な英語学習を促す取組の一環でもある。市内のアメリカンスクールの生徒たちや市在住アメリカ人との連携や交流は、英語学習者が英語や異文化に興味や親しみを持ち、英語学習に必然性を感じ、かつ、地域における異文化共生につながるきっかけにもなり得る。令和2年度から教科化された小学校英語教育に携わる小学校教諭も、生活に密着した英語学習・習得に取り組むことにより、小学校で英語を教えるに足る英語コミュニケーション能力の向上が期待できる。同時に、教師自身が英語学習における異文化理解の重要性を身近に感じ取り、その体験をもとに児童たちに言葉の背後にある文化について伝えることにより、英語という言葉の学習に対する動機づけにつないでいくことを可能にする。また、母語や自文化に関して今まで無意識であった事柄を意識化し考え直す機会も与えられる。さらには、国際的な視野を持ち地域に貢献するマインドを養うと同時に、両文化を尊重することにより、文化相対主義の姿勢を基盤に異文化共存の国際化を目指しながら、地域の国際交流や日米友好親善に一翼を担うことが期待できる。

日本とアメリカのスポーツ文化比較：高校野球を例として

高橋 強（東海大学湘南校舎 准教授）

本年は、オリンピックイヤーということで高校野球というスポーツに焦点を当てた研究発表を行います。そこで発表者が注目したのが日本とアメリカの両国に共通する野球とベースボールという国民的娯楽について考察を深めていきます。高校野球といっても日本とアメリカではとらえ方も違うし、考え方、システム、練習の仕方などどれをとっても異なります。高校野球に関して、日本とアメリカの相違を文化的な側面と研究データに基づいた数字により研究と考察を含めたものを発表いたします。発表では、特に高校野球と甲子園大会のありかたを取り上げ、野球とベースボールの歴史を通して、先行研究を紹介し、高校野球がどのように日本に定着していったかについて様々な大学の研究者の例を示すことにより、ベースボールから高校野球へと変遷していった過程と日本の高校野球が確立され独特の野球文化が形成されていった経緯について発表します。さらに統計による野球人口の相違など人口統計から紐解き、高校野球とベースボールの双方の人気度や礼節を重んじる日本の高校野球と勝利至上主義の日本の風土との関係、またベースボールはアメリカにおいては個性を伸長するスポーツであり、様々なスポーツの一つであるという考え方、つまり野球のシーズン以外はバスケットボールやアメリカンフットボールの選手として活躍することなどスポーツ文化についてもかなりの相違がみられます。また高校野球とベースボールに関して親のかかわり方も大変重要な要素になっていることがデータから垣間見えることとなり、親同士の間関係など実際にプレーしている選手以外の面で重要な要素となっていることがわかりました。これには練習のあり方や監督と選手の関係にも多大な影響を及ぼしています。厳しい練習をすることが美德とされる高校野球と褒めて伸ばすベースボールとの違いは何であるのか、一概には答えを見出すことはできません。なぜなら文化的な相違があるからです。これらのことについて高校野球とベースボールとの文化的な違いを総合的に比較し、独自の観点から発表することにいたします。

参考文献

池井 優 野球と日本人（丸善ライブラリー） 1991年

桑田真澄、平田竹男 新・野球を学問する 新潮文庫 2013年

（公財）日本高等学校野球連盟 2020年

宮本幸子 「母親のやりがい・負担感」に関する調査 笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 2017年

綿貫博人 日本の野球とアメリカ合衆国のベースボールの相違についての一考察 慶応大学体育研究所紀要 Vol. 42 (2003)

近代日本における中国女性像の考察 — 『女学世界』を中心に —

楊妍（東北大学国際文化研究科・GSICS フェロー）

今回の発表では申請者は清末・民国期に来日した中国女子留学生を取り上げ、彼女らと接する機会を持った日本人が、女子留学生との交流を介して、中国人女性のイメージがどのように形成されたかに注目している。日本人は中国留学生に対して「纏足」、「教育の欠如」など伝統女性のイメージを抱いたのみならず、実際の交流を通して「独立」、「勤勉」など進歩的な女性としてのイメージを抱くようになった。そこで本研究では、このような多様な認識を歴史的に解明することで、今まで明らかになっていなかった近代日本における中国女性像の形成過程を提示したい。

近代以降、清朝政府は近代化を遂げた日本に注目し、様々な改革運動を実施した。その一方で、日本の教育界も当時中国の教育機関との教育提携・交流を模索しており、日中双方の教育界の交流は清末から活発に行われた。日清戦争後の1896年以来、多くの中国人留学生が来日し、彼らを経由して清末に日本の近代化というモデルが紹介され、中国社会の政治や社会体制に多大な影響を与えた（周、2007年）。男性と異なり、中国の女性は長年にわたって封建礼教に束縛され、容易に国外に出ることができなかったが、日本へ留学する極少数の革新的な女性もいたのである。そして、近代的学校制度の制定によって中国女子も海を渡って日本に留学し始め、1904年から女性の留学ブームが出現した（孫、1995）。

先行研究では、中国女性の日本留学に関する史的事実（留学の背景、留学の経緯、女子教育政策、女子留学生が参与した社会活動、教育機関と関係者）に研究の重点が置かれることが多く、この時期の日本人から見た中国人女子留学生像、そして日本人との交流に関する研究は尠として存在しない。

そこで本発表では、明治大正期に刊行された日本の新聞、雑誌及び女子留学生の日記を用いて、「伝統」と「近代」の視点から考察することで、中国人女子留学生による「東洋文明の受容」と「異文化の交流」における思想連鎖の一側面を検討する。これにより、中国女子留学生が当時の日本社会にどのような認識と影響を与えたのかを明らかにする。

参考文献

- ① 周萍萍（2007）「日本における清国女子留学生と中国の近代女子教育」、『国学院大学大学院紀要. 文学研究科』（39）、p223.
- ② 孫石月（1995）『中国近代女子留学史』、中国和平出版社、p98.

「話題の～」を伴う記事見出し文が「事実上の広告」と解されるとき —関連性理論に基づく解釈可能性の記述として—

大谷鉄平（北陸大学 講師）

情報技術の飛躍的發展と国際化を背景に、我々の各種メディアとの接し方もマス・メディア全盛の頃と異なり日常の一部として浸透している。これに伴い、ことばを通じた情報のやり取りの実態記述の際も、メディアを踏まえた研究の重要性が日増しに高まっている。その中で、特に広告表現の様相の多様化は著しい（【図 1】）が、発信側が「これは広告である」と明言することは稀である。換言すれば、メディアが発信する言語情報を「広告」と捉えるか否かは個々の受信者の解釈に委ねられ、ある人は情報を鵜呑みにしたり、またある人は言語情報に胡散臭さを感じ取ったりする。

発信側の想定 assumption	宣伝・広告の企図	言語情報	例（作例による）
宣伝・広告を企図した言語情報の提示	明意 explicature	商品・サービスの情報提示	<ul style="list-style-type: none"> ・通常価格25,800円→今だけ1,980円！！ ・最新モデル搭載 ・日替わり特価 98円（1家族様1点限り）
		説得的モダリティの使用	<ul style="list-style-type: none"> ・試食していかれませんか？（＜勧誘＞） ・ヤセたかったらこれを飲め！（＜命令＞） ・肉だけでなく、野菜も摂取した方がいい（＜助言＞） ・ご自由にお取りください（＜許可＞）
	暗意 implicature	それとなく誘引する文言の使用	<ul style="list-style-type: none"> ・TVでおなじみのあのアスリートも大絶賛 ・今、世界中で話題沸騰中 ・知らないと損！今すぐ買いたい注目商品3選

【図 1】 宣伝・広告を企図した発信側の発話に対する閲覧側の解釈可能性の分類

本研究の目的は、発信される言語情報自体には「広告であること」が表明されずとも「宣伝・広告的だ」との印象を醸成する事例に関し、中でも特徴的な語句に着目し、その使用に伴う商用的作用を語用論、特に関連性理論 Relevance Theory に基づき記述することにある。そのうえで、本発表では、雑誌記事見出し文コーパス（Web OYA-bunko）に収録された「話題の～」を伴う事例に対し、批判的談話分析 Critical Discourse Analysis を参考とした批判的な読みを通じ、どのような解釈可能性が認められるか、特に、「事実上の広告」との解釈が得られる場合とは何か、についての検討結果を報告する。

本研究を含む一連の研究は、いわゆる語用論的意味のあり方の一端を示すことで言語学会への寄与が期待されるとともに、本質である宣伝・広告としての側面が背景化している実態を指摘することで、「情報を鵜呑みにすることの危険性」が叫ばれる現代社会における情報リテラシー分野に対しての一事例を提供し得るものとなる。

なお、本研究は、大谷（2016）「語（句）の商用化について—雑誌記事タイトルにみられる「話題」の場合を例に一」（『長崎外大論叢』20、長崎外国語大学、pp.57-72）で「今後の課題」とした内容への取り組みであり、結果的には当該論文の発展的議論となろう。

食感表現に関するオノマトペの日中対照研究

侯宜卓（東北大学国際文化研究科言語科学研究講座 博士後期課程1年）

オノマトペは食品の性状を強く反映しており、食品の特性や人間の感覚特性を客観化する極めて重要な情報である。近年、商品名や宣伝広告などでもオノマトペで食べ物のおいしさや特徴を表現する事例が増えていて、味覚を表現するオノマトペに対する関心が高まっている。

本研究では、料理テレビ番組からオノマトペを収集したうえで、形態と属性から両者の類似点と相違点を解明する。さらに、日中の食感表現に関するオノマトペの特徴を明らかにすることを目的とする。

『ペコジャニ∞!』2017年10月30日から2018年9月24日まで放送されていた料理バラエティ番組全26回からオノマトペ96語を収集した。『回家吃饭 (huíjiāchīfàn)』2018年01月01日から2018年01月31日まで放送されていた料理バラエティ番組全31回からオノマトペ16語を収集した。収集したオノマトペを形態と属性による分類し、日中の食感に関するオノマトペの特徴をまとめた。

その結果、形態から見ると、日本語と中国語のオノマトペは主に一音節と二音節で構成されるが、日本語の場合二音節のオノマトペの数が圧倒的に多い。中国語の方はオノマトペの形態が多様であり、ABB型が一番多い。属性から見ると、「聴覚」を表すオノマトペが一番多いのは日中で共通している。また、日中の食感に関するオノマトペは主にプラス評価のオノマトペで、まずい食感を表す時は、オノマトペを使いたくない傾向がある。相違点についてまとめると、日本語の場合、「聴覚」類以外に、「テクスチャー・弾力」類のオノマトペの数が多。中国語の方は、「聴覚」類以外に、「テクスチャー・歯応え」類のオノマトペの数が多。日本語の食感表現は中国語より種類が多く、非常に豊富である。それは日本人が弾力があるものを好み、中国人は歯応えがよいものを好むこととの関連があると思われる。

以上のことから、日本語の食感のオノマトペは「弾力」を中心に極めて多彩な表現で、繊細に異なる食感を表し、中国語の食感のオノマトペは「歯応え」を中心に少数の表現で、簡潔に食べ物の美味しさと不味さを表すという特徴があると主張する。

ハリウッド映画『彩られし女性』（1934）における“他者化”される中国

孫 蘇渝（東北大学大学院国際文化研究科・博士後期課程）

映画『彩られし女性』（1934）はイギリスの作家であるウィリアム・サマセット・モームの長編小説『五彩のヴェール』（1925）から翻案された作品であるが、先行研究では小説『五彩のヴェール』に関するものが多い一方で、その翻案映画『彩られし女性』に注目するものはかなり少ないと言える。その中で、サブリーナ・ローズ・リー（Sabrina Rose Lee）（2018）は日本人の女優トシア・モリ（Toshia Mori）に注目し、『彩られし女性』において彼女が扮する脇役の舞姫像を考察する。この研究者はその舞姫のキャラクターが「東洋を象徴する見世物の一部」に過ぎないと指摘しているが、われわれの観点からすればそれは、単に白人の観客のために用意された“他者”であると考えられる。そういったオリエンタリズムの視点に立つ研究は本稿の問題意識と軌を一にするが、いまだにいくつかの解明すべき問題点が残っていると考えられる。それは、まず研究内容の中では女優トシア・モリの表象以外の中国像が考慮されていないため、それ以外の中国像に関する考察も進めることで、映画における“他者像”としての中国の全体像を検討する余地がまだあると考えられる。次に、女優トシア・モリが扮する舞姫は白人の観客のために用意された“他者”であるが、映画はいかにそういった“他者像”を構築しているのか、さらにその“他者像”が形成される理由、言い換えれば、映画での中国像の背後にある歴史的背景への詳しい考察が不足していると思われる。

上述した問題を解明するために、本稿はハリウッド映画『彩られし女性』において表現された中国の全体像を視野に入れ、中国がいかに“他者化”されるのか、そして構築される中国像と映画製作時の時代状況との関連とは何か、という問題意識のもとに、映画『彩られし女性』における中国像への考察を進めることにする。研究方法としては、エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』を参照し、それを主要な操作概念としながら、映画製作者がこしらえ上げた中国に対するステレオタイプを批判的に検討する。本稿の研究意義としては、ハリウッド映画『彩られし女性』における異質の“他者”として描かれる中国を検討することで、映画をより歴史的なコンテクストに位置づけ、映画作品の歴史的な意義を見定めることが考えられる。それに加え、映画作品に取り込まれた中国像の検討によって、もともと存在していた“他者”に関するステレオタイプをいかに映画メディアが利用しているのかをより明確にできることである。

最後に、本稿の結論として、映画『彩られし女性』における中国は映画内の登場人物と映画外の観客が自分自身の人種・文化の優越性を確認するために用意された“他者”である。そういった“他者化”される中国は、オリエンタリズム的な思想が深く浸透する結果であり、当時の西洋社会に蔓延するアジア人に対する黄禍論（Yellow Peril）の反映でもある。

北朝鮮人権映画『愛の贈り物』の政治的無意識を読む ——「父」の不在と「愛」の重層性を中心に——

李惠慶（大阪経済法科大学・客員研究員）

本発表は、1990年代後半の北朝鮮の厳しい状況を描いた映画『愛の贈り物』(사랑의 선물、The Gift of Love)における政治的無意識を読むことが主な目的である。なかでも「父」の不在と「愛」の重層性に焦点を当ててテキストを読み直し、この映画の表象的特徴を浮き彫りにしながら、当時の北朝鮮社会の一端を探ることが第一のねらいである。

『愛の贈り物』は2018年にキム・ギョミン監督が脚本・演出・制作した北朝鮮人権映画である。1999年に脱北し、2001年に韓国に入国した監督は、大学で映画を学んだ後、2011年『冬の蝶々』という長編映画でデビューを飾った。以降、自分の経験をもとに北朝鮮の人権問題を描き続け、『11月9日』(2014年)『ファースト・ステップ』(2016年)などを発表している。本発表で取り上げる『愛の贈り物』は、監督が実話をもとに制作している「冬の蝶々」シリーズ全5作のなか、3作目に当たる作品である。資金調達から俳優のキャスティング、上映に至るまで様々な困難が続き、韓国では紆余曲折の末、映画完成から約1年後の2019年に封切られた。一方、海外では完成直後から注目を集め、アメリカ・イタリア・フランス・イギリス・香港などでの多数の国際映画祭に招聘・ノミネートされ、ニューヨークのアコレード国際映画祭(Accolade Global Film Competition)の「Liberation/Social Justice/Protest」部門優秀賞を皮切りに、ロンドンインディペンデント映画祭では最優秀作品賞を、ミラノ国際映画祭及びクィーンズ国際映画祭では主演女優賞を受賞するなど、高評を得ていた。

映画の中心に据えられているのは、1990年代半ばに北朝鮮を襲った深刻な食糧難のなかで、「苦難の行軍」を乗り切れず、自ら命を絶たざるを得なかった傷痕軍人家族の悲劇である。食料配給が停止し、絶糧状態が続くなか、国のため建設現場で「戦っていた」陸軍少佐の夫が事故で下半身不随になる。そうした夫の治療費と幼い娘との生活費を工面するため、妻は借金し、体まで売るが、それにより家族はさらに追い込まれてしまう。夫の負傷で国からもらった小さな家まで警察に奪われ、路頭に迷うことになると、すべてに絶望した夫と妻はそれぞれに幼い娘を託す遺書を残し、毒を飲んで自死する。この映画ではその悲劇が相反する他の二つの物語と対比をなしながら重層的に描かれ、「地上の楽園」どころか、地獄と化し、国家としての機能を失った北朝鮮の現実を浮き彫りにしている。

以上の踏まえ、本発表ではこの映画における「父」の不在と「愛」の重層性に光を当て、北朝鮮がどのように表象され、批判されているのか、そして大飢饉や食料配給制度崩壊などの危機が北朝鮮のジェンダー秩序に何をもたらしたのかを明らかにするとともに、監督のいう北朝鮮との「文化戦争」「文化ゲリラ戦」の意味やこの映画の韓国での受容の仕方について考えてみる。

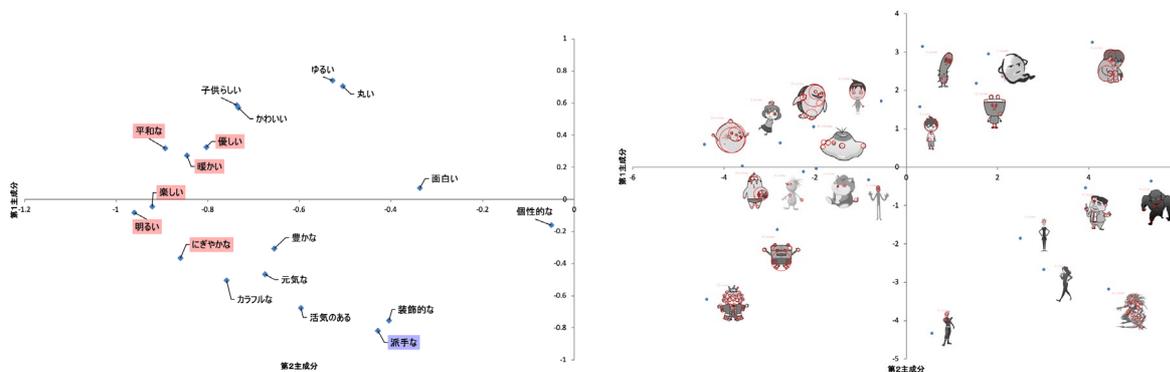
円検出ツールを活用した印象評価分析法の可能性

森崎巧一（京都経済短期大学），小路真木子（京都経済短期大学），郭潔蓉（東京未来大学），
高木亜有子（湘北短期大学）

造形の構成要素には、点や線、面などがあり、造形の表現は、これらによって形成された基本的な形（丸や三角や四角など）の組み合わせによるものである。したがって、デザインを分析する場合において、丸や三角などの基本図形が作品中にどの程度含まれているのかを分析することは有意義である。そして、デザインの制作には人の感性が大きく関わっているため、基本図形が作品中にどのように含まれると、どのような印象に影響するのかなどが解釈できれば、さらに有意義なものとなるだろう。

以上のような観点から、JSPS 科研費（17H07315）の助成を受け、「画像解析を取り入れた印象評価分析ツールの開発」の研究プロジェクトを遂行し（H29～H30）、画像の分析作業をなるべく効率化し、基本図形の抽出や計算を自動化するツールの開発に取り組んだ。この研究プロジェクトの中で、特に上記の基本図形の分析に少しでも近づけることができた画像解析ツールとして、任意の画像から「円」と判定できるものを数え上げるための「円検出ツール」と、それを用いた新たな印象評価分析法の可能性について本研究で紹介する。

キャラクターイラスト画像とその印象評価データを用意し、円検出結果を印象分析結果に重ね合わせる実験を試みた。本研究プロジェクトで開発した主成分分析ツールは、主成分負荷量の散布図作成だけでなく、円検出結果を貼り込んだ主成分得点の散布図作成が可能である。主成分負荷量（左図）をみて、第1主成分は「高揚性」、第2主成分は「華飾性」と解釈してみたが、実際に主成分得点の散布図（右図）では、左ほど明るめのひょうきんな印象のキャラクターが並び、そして、下ほど派手で凝った印象のキャラクターが並んでいる。円検出結果もあわせて確認すると、左の方では円（特に大きな円）が多く含まれる場合、明るい（高揚する）印象を与えているように見え、下の方では小さい円が密集しているものは派手な（華飾の）印象を与えているように見える。この結果から、画像中に含まれる円の大きさや数は、印象評価分析において活用可能性があると考えられる。但し、人の印象は形だけでなく色にも影響を受ける上に、現状の円検出ツールは正円しか検出できない等の改良の余地が残されており、ツール開発や研究は今後も継続する必要がある。



文学作品にみられる笑いのオノマトペの役割 —「ホホ」の類型語を中心に—

夏逸慧（東北大学・研究員）

文学作品にみられる笑いのオノマトペ「ホホ」に関して、山口（2020）は平安時代に執筆されたとされる中古文献『落窪物語』には「ホホ」がみられ、これは男性の笑い声を描写していると指摘しているが、飯田（1999）によれば、江戸時代に入ってから、歌舞伎・浄瑠璃の脚本など近世の演劇において、「ホホ」は女性の笑い声として用いられるので笑い声から性別が判断できるとの指摘がある。また、金水（編）（2014）では、「（オ）ホホホ」が「お嬢様」「奥様」というキャラクターの笑い声として用いられることが提示されている。このように、先行研究では「ホホ」に関して、時代を経るにつれ女性の笑い声を積極的に示唆することが指摘されているが、「ホホ」の類型語には、形式的にどのような特徴があり、それぞれどのようなキャラクターと結び付けられるかは具体的には解明されていない。

そこで、本研究は「ホホ」、「オホホ」、「ホホウ」、「ホッホッホ」など「ホホ」の類型語を対象として、それぞれがどのような笑い方を描写しているのか、どのようなキャラクターの人物像と結びつけられるかという点について明らかにすることを目的としている。調査データとしては、「ホホ」の類型語が多く使われていた泉鏡花と海野十三の作品（明治～昭和中期）、また近現代文学作品が収録される『BCCWJ コーパス』と『青空文庫』の二つのコーパスを用い、一音節語基「ホ」を含む笑いのオノマトペを収集する。収集した「ホホ」の類型語は、1) 語基反復型: $C_1V_1C_1V_1$ 、2) 接頭辞添加型: $[pre(C_1)V_1]-[baseC_2V_2]C_2V_2$ 、3) 長音添加型: $C_1V_1RC_1V_1R/C_1V_1C_1V_1R$ 、4) 促音添加型: $C_1V_1QC_1V_1Q/C_1V_1C_1V_1Q$ という四種類に分ける。それを笑い声、笑う表情、笑う姿態、笑いの内容、笑いの程度、笑う人という六つの分析要素を設定し、笑い声とキャラクターの関連性を整理する。それぞれの調査で得られた結果は、以下のようにまとめられる。

- 1) 語基反復型「ホホ」は、類型語として基本的な笑い声であり、特に「美女」「奥様」という女性キャラクターの笑い声として多用されている
- 2) 接頭辞添加型「オホホ」は、使用例が最も少なく、口籠って笑う様子を表している。「年配の女性」の笑い声として用いられる傾向がある。
- 3) 長音添加型「ホホウ」は、主に社会的地位の高い男性が、感心したり驚いたりするときに発する声を表す。また、それとは別に、身分の高い男性の笑い声を描写する傾向もある。
- 4) 促音添加型「ホッホッホ」は、「バカ笑い」、「変な笑い声」として用いられることが多く、キャラクターの性別に差は認められない。

岩井俊二『リップヴァンウィンクルの花嫁』に語られる社会問題 —— ポスト3・11の視座より——

范 淑文（台湾大学・教授）

3・11 東日本大震災が発生してから今年（2021年）で十年となり、去る2月、3月に各地で人類未曾有の自然災害、否人類が自ら招いた禍をもう一度思い出し、様々なシンポジウムや集会が開催され、将来に向けて我々ができる事は何かについて思索し、議論された。

川上弘美や多和田葉子などプロの作家のみならず、アマチュア作家もポスト3・11の社会構造やさまざまな社会問題に目を向け、こうした問題と向き合うように創作に励んでいる。映画監督岩井俊二もその一人である。

岩井氏は3・11震災地に足を運び、現地の被害者の声を取材し、震災直後の様子や遺族の生活振り、被災者の心境を映像に記録してきた。記録映画以外に、文学作品も幾つか発表した。『番犬は庭を守る』（2012）のような3・11を題材にした作品のほか、『リップヴァンウィンクルの花嫁』（2015）という震災の色彩を直接に反映しない作品も挙げられる。

後者である『リップヴァンウィンクルの花嫁』は皆川七海という、大学卒の女性が家庭問題が原因で一人細々と生きていく日々が描かれている作品である。ネットによる婚活で中学校の教師である男性と結婚はしたが、間もなく離婚し、何でも斡旋する仲介屋さんの世界に入った。そこから日本社会の様々な醜態が女主人公七海の眼を通して暴露されていく。

震災を直接に反映してはいないように見えるが、震災後の被災者の心の傷を彷彿とさせるような一女性の生き方、日本独特な社会構造のもとでの女性の生き方のつらさ、人間関係の複雑さ、歪んでいる社会の価値観などなどの社会問題が細やかに描かれている。

本発表では女主人公七海をはじめ、七海が巻き込まれたその仲介屋のキャラクターを考察し、それらの設定の象徴、ポスト3・11に見えてきた日本社会の様々な問題を明らかにしてみる。七海の結婚、離婚、更なるその仲介屋——なんでも演じる仲介屋——という設定による社会の百態が広げられている。その七海の視点でみたそれらの社会の考察や分析を通して、日本社会に長い間潜んでいた陋習や不平などが浮き彫りしてくる。七海や仲介屋で知り合った真白などの弱い立場の人間が受けた待遇、現代日本社会のシステムがこうしたマイノリティの生存に常に不可視的な暴力や一種の迫害を与えていると捉えられよう。それらは震災後の被害者たちの心の傷を暗喩しているとも見做せよう。こうした弱者を描いていることを通して、現代日本社会における文化への批判という作者のまなざしも感じられよう。

『シルヴィとブルーノ』および『シルヴィとブルーノ完結編』に見られる AR および VR 要素

堀秀暢（津山工業高等専門学校・講師）

ルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-1898）の作品『シルヴィとブルーノ』（*Sylvie and Bruno*, 1889）および『シルヴィとブルーノ完結編』（*Sylvie and Bruno Concluded*, 1893）はその世界観の設定が、世界的に有名な『ポケモン GO』をはじめとする現代の AR および VR 技術と共通している。AR 技術とは「現実空間を基準としてそこに情報を付加し、現実を拡張するもの」である。VR 技術とは「バーチャル空間の中だけで人間が情報を受け取るもの」である。『シルヴィ』の斬新さについて論じられることはあるが、これらの技術と作品の共通点に関する指摘はまだない。キャロルが生きた時代である 1832-1898 に AR および VR の技術は当然ながら存在していなかった。そのため、読者の理解を促す目的で、キャロルは作品中で三種の世界、現実世界、AR 様の世界、VR 様の世界が描かれることを説明している。

- (a) the ordinary state, with no consciousness of the presence of Fairies;
- (b) the “eerie” state, in which, while conscious of actual surroundings, he is also conscious of the presence of Fairies;
- (c) a form of trance, in which, while unconscious of actual surroundings, and apparently asleep, he (i.e. his immaterial essence) migrates to other scenes, in the actual world, or in Fairyland, and is conscious of the presence of Fairies.¹

ここでは、人間の精神状態を(a)「通常の状態：妖精の存在を認識できない」、(b)「“eerie”(不気味)な状態：現実を感じながらも妖精の存在を感じる」、(c)「トランス状態：意識が現実世界から離れ妖精の国に移行する」と説明される。この(b)の状態は現代では AR といった名前が付けられている。

もとより文学作品というメディアは、読者に VR と同様の「精神的移動体験」を与える。キャロルは、こうした文学作品が持つ VR の要素を作品内で異世界として表現することに加え、現実世界と異世界を交差させることで読者に AR の技術を想定させる。本研究は、上記のキャロルの二作品を VR や AR の観点から分析を行う。これにより、キャロルが表現する妖精や妖精の国、そしてそれらのものごとに対する登場人物の認知や意識の変容を明らかにする。

¹ Lewis Carroll, *The Complete Illustrated Works of Lewis Carroll* (Chancellor Press, 1990) 441.

『小泉八雲英文学史』からハーンが語るバイロン像を読み解く

山口裕美（津山工業高等専門学校・准教授）

『小泉八雲英文学史』（*A History of English Literature*）はラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）によって執筆されたのではなく、彼の授業を受講した学生の筆記録にもとづいている。ハーンは1896年から1903年にかけて東京帝国大学の英文学講座を担当していた。本書は、古英語による作品からヴィクトリア朝時代の文学作品までの題目が網羅されており、基本的には作家名を取り上げながら各作品を紹介する講義録となっている。

本書は、その序文によると、1900年から1903年の間の講義に端を発している。本研究発表では、ジョージ・ゴードン・バイロン（George Gordon Byron, 1788-1824）に関する記述に注目する。バイロンの項目では、詩人の作品についてタイトルを紹介しながら、簡素な説明がなされている。その一方で、詩人の伝記的背景の解説に集中している特徴がある。

現代の日本での高等教育において、英語圏文学、特に19世紀イギリスロマン主義時代を紹介する場合、ウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth）やP. B. シェリー（P. B. Shelley）、ジョン・キーツ（John Keats）を中心として自我の肥大化に注目を集めることが多い。一方で、バイロンの作品に関しては周縁的な役割を担うことが多いものの、その伝記的背景が特異であるためか、作品よりも人物像に関心を置かれることが多い。バイロンに関する伝記的背景への注目は、バイロンの死後に執筆されたトマス・ムーア（Thomas Moore）による『バイロン伝』（*The Life of Lord Byron*）を中心として大きな影響をあたえてきた。さらに後年、1800年代末期から1900年代初頭までの間に、バイロンの伝記的背景にかかわる記述が複数の文学研究者によって執筆されてきた。これらの説明は、バイロン作品の編集本の序文、もしくは後注として収録されている。また編集本の内容構成から、主として英文学を学習させるという目的が含まれていることがわかっている。これらのことから、学習者である読者たちは編集者による作家解説によって、バイロンの人物像を補完しながら、収録された作品を受容していたと考えられる。

『小泉八雲英文学史』もバイロン作品に付された解説の多くも、英文学を学習することを目的としている点については同様であるといえる。そのため今回の研究対象は、特に英文学学習者を対象と想定して執筆された記述に限定する。それぞれの解説によってバイロンが表象されているように、ハーンもまた英文学を教授する立場から、自分自身が持っていたバイロン像を創出し、学習者に情報を提供していた。本発表では、ハーンと同時代に執筆されたバイロンに関する伝記的記述と比較しながら、彼のバイロンへのまなざしを取り上げる。そして、ハーンがどのような物語性をバイロン像にあたえたかを考察する。

植民地朝鮮における万葉集の朝鮮語訳

朴相鉉（慶熙サイバー大学・教授）

日本の学界ではそれほど知られてないが、植民地朝鮮では万葉集の一部が朝鮮語で訳されたことがあった。誰が、いつ、どんな歌を、なぜ、どのように、朝鮮語で翻訳したのだろうか。

まず、徐斗銖(서두수、Seo Doo Soo)から見てみよう。徐は1925年に京城帝国大学に入学し、1930年に卒業した。在学中、彼は「国語学・国文学講座」で勉強した。以降、大学で教鞭を執った。ところで、徐斗銖は1942年11月2日から12日にかけて防人歌(89首)を朝鮮語で訳し、朝鮮総督府が発行した『毎日申報(매일신보)』に連載した。「防人歌：稚拙な移植」がそれである。徐が防人歌を翻訳し当時の朝鮮の人々に紹介した理由は、防人歌には「忠君愛国」という日本人の心が宿っていると考えたからだ。彼が5・7・5・7・7といった和歌のリズムを尊重しつつ、防人歌を訳した。たとえば、次のようだ。

卷 20・4373

今日よりは 顧みなくて 大君の 醜の御楯と 出で立つ吾は
오늘이제론(5) 내사도라볼것가(7) 우리聖上의(5) 선방패내가되여(7) 길을내떠나료니(7)

(アラビア数字は引用者。以下、同)

次に、金億(김억, Kim Ok)を見てみよう。金は1914年に慶応義塾に入学し、英文学を勉強した。帰国後、詩人や翻訳家として活動した。ところで、彼は1943年7月から8月にかけて『毎日申報(매일신보)』に「万葉集鈔訳」を連載した。ここには万葉集から選ばれた60首が朝鮮語で訳されている。妻との別れや妻の死を悼む歌、皇子の死を悼む歌、飲酒を賛美する歌などが載せられていた。金億が万葉集を朝鮮語で翻訳した理由は、皇民化と「国語」(＝日本語)の普及のためだったと言える。彼は徐斗銖と違って万葉集の歌を翻訳する際、和歌の5・7・5・7・7に従わなかった。その代わりに、朝鮮の歌調(시조、sijo)のリズム、すなわち3434・3543(両章歌調型)を借りて翻訳した。たとえば、以下のよう。

卷 4・639

吾背子か かく恋ふれこそ ぬばたまの 夢に見えつゝ いねらえすけれ
이몸을(3) 아니닛고(4) 생각을(3) 하느탓가(4)
꿈속을(3) 그님이뵈여(5) 잠못이뤄(4) 하노라(3)

*

つまり、徐斗銖と金億は太平洋戦争期に万葉集を朝鮮語で訳することで文化人として当時の戦争に積極的に参加したと言える。ただし、翻訳のスタイルは異なった。それは彼らの学問的背景やアイデンティティによるものだと考えられる。

比較文化論 No. 39

発行：

2021年9月19日

日本比較文化学会

本部事務局：

〒803-0835 北九州市小倉北区井堀 1-3-5

西南女学院大学 林裕二研究室内

日本比較文化学会第43回全国大会・2021年度国際学術大会

運営委員会事務局：

〒120-0023 東京都足立区千住曙町 34-20

東京未来大学 郭潔蓉研究室内

e-mail: kaku-iy@tokyomirai.jp